



Title	東南アジアのラーマーヤナ : 3. ビルマ（ミャンマー）の伝承
Author(s)	大野, 徹
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1995, 5, p. 139-186
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99710
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

東南アジアのラーマーヤナ

3. ビルマ（ミャンマー）の伝承

大野 徹

この号では、前前号、前号に引き続き、東南アジア各国に伝播しているラーマーヤナの内、ビルマ（ミャンマー）の伝承を紹介する。ビルマには刊行された版だけでも13点にのぼるラーマ物語が存在すると言われる（ビルマ国立図書館の館長ウー・キンマウンティン「U Khin Maung Tin」からの筆者宛書簡による）が、本稿では筆者が実際にその内容を調べた主要4作品（1. ヤーマ物語、2. ヤーマ・タージン、3. アラウン・ヤーマ・タージン、4. ヤーマ・ヤガン）について、その記述内容を抜粋、紹介する。

1. ヤーマ物語 (Rama Wutthu)

ヤーマ物語は刊本ではなく、ラングーンの大学中央図書館に収蔵されている貝葉で、1871年に筆写されたビルマ語の散文形式のラーマーヤナである。その梗概は、次のようになっている。

1. ランカーディーパの羅刹王インナガシップには、嗣子がない。行者に供物を捧げて子宝を祈願する。梵天界より梵天が降下して妃に託胎する。月満ちて娘が誕生する。クンティーと名付ける。クンティーは成長しても結婚しない。羅刹王は娘を森に追放する。クンティーはダッタギーリ森のコータンパ行者の下で修行する。8万年間持戒を続けたクンティーに梵天王が願いを聞く。女行者はマンゴーの枝を3本折り取る。1本が地上に落ちたので洗い清めてから梵天王に捧げる。私には子供がない。老齢になった時、扶養してくれる人が欲しいと祈願する。献上されたマンゴーの枝3本の内、1本には実が10個付いている。故に、生まれてくる子供の内、長男は一つの体に頭が10個付いている。テインコー島を支配す

る。もう1本の枝には実が1個しか付いていない、故に、次男は骨格豊かな巨人となろう。最後の枝は地上に落ちたものを洗い清めて供えたのだから、清浄な人物となろう。梵天王はその様に予言し、女行者の腹を3回撫でて梵天界に帰った。

2. 羅刹女クンティーは、月満ちて1児を出産する。ダッタギリの森で出産したのでダッタギリ（ダシャグリーヴア）と命名する。頭が十個あったので、ダッタすなわち十と言う意味も現わす。次男もその森で出産する。クンバカンナ（クンバカルナ）と名付ける。第3子は屋敷で出産したのでビビータナ（ヴィビーシャナ）と命名する。成年に達した子供達3人が、自分達の父親は誰なのか母親に尋ねる。その結果、祖父はティンコー島の支配者、母親はその娘、父親は梵天王である事を知る。父親との再会を求める子供達に、クンティーは、瞑想を続ければ逢えると教える。8万年間持戒を続けたところ、子供達の前に梵天王が姿を現わし、願いを適えて上げると言う。ダッタギリの望みは、(1)乾達婆、緊那羅、竜、阿修羅等命ある者からの襲撃に対して不死身であること、(2)火、水、刀、槍等による攻撃に対して不死身であること、(3)いかなる武器に対しても十個ある頭は無事である事の3点である。(1)については人間と猿、(2)(3)についてはアッタサンダ（Addha Canda=半月形の武器）を例外として、望みが適えられる。クンバカンナの願いは、8万年間の持戒と修行で睡眠不足となっているため、12年間に1度目覚める事にして欲しい。ビビータナは、善人とのみ付き合い、悪人とは付き合わないと言う事であった。

3. 老齢になったティンコー国王は、孫のダッタギリに王位を譲る。ダッタギリは阿修羅王の娘マンドーガリーを妃に迎える。マンドーガリーは1子を出産するが、出産の時に雷鳴が響き渡ったので子供にメーガナータ（雷鳴）と名付ける。成人したメーガナータは、母方の祖父阿修羅王が帝釈天と鬭った時に祖父を支援し帝釈天に勝った事からエインダセイタ（インドラジット=征因陀羅）と呼ばれる。ダッタギリはエインダセイタを皇太子に任じる。忉利天から阿修羅までを支配することになったダッタギリは、王の十徳（布施、持戒、廉直、忍辱等）を忘れ、飲酒銘酌、傍若無人の振舞を繰返す。

4. タップリッタ以外の誰とも結婚しないと誓って修行中の乾達婆王の娘をダッタギリが見初める。ダッタギリは、口説かれて逃げ出した女行者を執拗に追跡し

て、遂に手込めにする。戒を破られた娘は、汝の頭は椰子の実と同じように落下するがよいと呪って火中に飛び込み焼死する。

5. ケイタケインダー（キシュキンダ）の森に棲む猿の王バーリーが東に向って朝日を拝んでいると、その頭上を飛車に乗ったダッタギリが通り掛かる。ダッタギリはガンダマーダナ（香酔山）へ向うところだった。断りもなしに他人の頭上を通り越えるとは怪しからんと怒ったバーリーは、空中に飛び上がり、飛車を蹴飛ばし、脇の下に挟んで海上を3回飛翔する。ダッタギリは、梵天王に願い事をした時、人間と猿とは例外にされたことを思い出し、非礼を詫びてバーリーと親睦を結ぶ。

6. 閻浮提にアヨウタヤという国がある。国王の名はダッタラッタ（ダシャラタ）。十徳で国を支配する。妃は3人。第1王妃はコータンラー（カウサリヤ）王の姫、第2王妃はトゥディタ王の姫トゥメイタ（スミトラ）、第3王妃はコーカリッ王の姫コーチー（カイケーイー）という。3人とも子宝に恵まれない。ある時、帝釈天と阿修羅とが戦争をした。ダッタラッタは帝釈天を支援した。勝利を得た帝釈天は、協力者ダッタラッタにタッタベーティという武器を与えた。アヨウタヤへ戻った時、阿修羅との戦闘で負ったダッタラッタの傷をコーチー妃が治した。望みの物を与えると言う王の申し出に、コーチーは、必要な時に戴きますと答える。

7. 帝釈天に貰った武器タッタベーティの効能を試すためダッタラッタは、人里離れた森へ出掛ける。その森では、盲目の両親を息子の行者が扶養している。水汲みにきた行者を、象が水飲みに来たと勘違いしたダッタラッタは、タッタベーティで射る。悲鳴を聞いて水場に現れたダッタラッタに、行者は尋ねる。汝は何者か。なぜ某を射たのか。某には目の見えない両親がいる。某が死んだ後、誰が盲人夫婦の面倒を見てくれるのだろう。ダッタラッタは、誤って弓を射たことを詫び、そなたの両親は自分が責任を持って扶養すると約束する。庵を訪れたダッタラッタは、身元を明かし、誤って息子さんを射殺した。お二人の面倒は自分が見ると申し出る。両親は申し出を断り、息子のそばへ案内するよう求める。

8. 行者の庵の南1由旬のところに弁髪を結った行者トリジャタがいる。子宝の授かり方をその行者に尋ねるよう盲人夫婦に教示されたダッタラッタは、トリジャ

タを訪ねる。一部始終を聞き終わった行者は、ダッタギリにバナナを2本与える。王宮に戻ったダッタラッタは、コータンラー妃とコーダー妃にバナナを1本ずつ渡す。王妃は、二人とも自分が貰ったバナナの半分をスミトラ妃に分け与える。

9. テインコー島の羅刹の頭領ダッタギリの悪行に困り果てた地母神が、懲らしめてくれる人はいないかと帝釈天に相談する。帝釈天は、兜率天で待機中の菩薩に下界に降下して人間に転生するよう依頼する。菩薩は、アヨウタヤ国王ダッタラッタの第1王妃コータンラーの胎内に託胎する。同時に、他の天3天もコーダー、トゥメイタ両妃に託胎する。誕生したコータンラー妃の男児はヤーマ（ラーマ）、コーダー妃の男児はバラタと命名される。トゥメイタ妃はバナナを半分ずつ貰って食べた事から二児を出産、レッカナ（ラクシュマナ）、タッダルグナ（シャトルグナ）と命名される。

10. ケーラーターーパ山でダッタギリを呪って火中に飛び込み焼死した乾達婆王の娘は、ダッタギリの妻マンドーダリーに託胎、女児として生まれる。ダッタギリは自分が死に追いやった娘の事を思い出し、嬰兒を鉄の函に入れて海中に投棄する。函はザネッカ（ジャナカ）国の砂浜に漂着し、砂に埋もれる。ザネッカ国王の王弟3人には皆子供がいるが、国王には子供がない。コータンパ行者に尋ねると、牡牛に鋤を付けて耕作するよう進言される。言われた通りにすると、鉄の函が見付かる。蓋を開けると美しい姫がいる。ザネッカ王は、ティーダー（シーター）と名付けて育てる。

11. カーカーウンナ（パーリ語Kāka）と言う名のカラスがいた。コータンパ行者が食べ物を探しに外出している間に、庵に入って食い荒した。困り果てた行者は、アヨウタヤへ行き、ヤーマ王子にカーカウンナ懲罰を依頼する。行者に同道したヤーマは、カーカウンナを捕え片目をくりぬいて放免した。行者は王子に学問を伝授する。

12. ザネッカ王に育てられたティーダー姫が成長する。その美しさが諸国に知れ渡ると、求婚が殺到する。困惑したザネッカに相談された大自在天は、弓を授ける。ザネッカは、その弓を射る事ができた者に姫を嫁がせると公表する。腕自慢たちが集結した。しかし、神与の弓は、射る事はもちろん持ち上げる事さえできない。ダッタギリは、弦を引く事こそできなかったものの、弓を持ち上げる事は

できた。ダッタギリは、弓を持ち上げ得たのは自分一人だから、ティーダーは自分に引き渡すべきだと要求する。ヤーマ王子が弓を持ち上げた。弦を引くと、大音声と共に弓が折れた。たまげたダッタギリは、テインコー島へ遁走した。ヤーマがアヨウタヤ国の大ッタラッタ王の王子であることを知ったザネッカ王は、ティーダー姫との結婚を承諾する。ヤーマ王子の弟3人も、ザネッカ王の姪3人とそれぞれ結婚する。

13. 前式に列席したダッタラッタ王は、新婚夫婦4組を同伴してアヨウタヤ国へ帰国する。帰国の途中、金剛杵を手にしたパシューラーマ（パラシューラーマ）がヤーマ王子に挑み掛る。パシューラーマが放った火矢をヤーマ王子がメーガムッカ矢で打ち消す。パシューラーマはヤーマが菩薩であることを悟り、今後はヤーマを支援すると述べて立ち去る。

14. コーケー妃の実父コーカリッ王が死去し、皇太子が即位することになる。戴冠式にはコーケーの子であるバラタ王子も弟タッタルグナを伴って列席する。二人の留守の間に、8万歳に達した父親ダッタラッタ王が、王位を長子ヤーマに譲る決心をする。戴冠式の日取も決まる。ヤーマ王子の王位継承を知った保母コウパシーが、コーケー妃に事実を伝える。ヤーマ王子の即位が実現すれば、バラタ王子が王になる可能性は無くなる。かつてダッタラッタ王がコーケー妃に与えた約束を活用して、ヤーマ王子を12年間森へ追放し、バラタ王子に王位を譲るよう要求しなさいと、コウパシーは教唆する。コーケーの要求を一旦は断ったものの、ダッタラッタ王は約束の履行を迫られて苦悩する。父の苦しみを知ったヤーマ王子は、父が約束を反古にすることがないよう、弟に王位を譲り自分は12年間森で暮すと告げる。妻のティーダーも、弟のレッカナも、ヤーマ王子との同行を希望する。

15. ヤーマ王子一行が森へ去った後、ダッタラッタ王が逝去する。コーカリッ国へ行っていたバラタ、タッタルグナ兄弟が呼び戻される。母親から一部始終を伝え聞いたバラタは、兄の後を追う。ヤーマに会って父の死を伝えたバラタは、王位を継ぐようヤーマに要請する。コーケーと交した父の約束を果たしたいと主張するヤーマは、弟の申し出を拒否する。自分の代りにインドキチジョウソウで編んだ草履を渡し、玉座に置くよう指示する。

16. テインコー島の羅刹王ダッタギリには、トリガターと言う妹がいる。トリガターは、タンブックラー森での生殺与奪の権を兄に認められている。森の中にヤーマ王子の一一行が現れる。トリガターの二人の息子カル（カラ）とトウタラ（ドゥーシャナ）は、餌食が現れたと駆け寄る。レッカナとの間で戦闘が始まり、カルとトウタラが殺される。息子二人の死を知ったトリガターは、兄の力を借りて3人を食い殺そうと、テインコー島へ赴いて一部始終を報告する。トリガターの報告を聞いたダッタギリは、自分には引けなかった弓をヤーマが引いた。自分の手に負える相手ではないと二の足を踏む。トリガターが、ヤーマ、レッカナ兄弟は自分が遠方へ誘い出す。その間に、ティーダーを連れ去ればよいと提案する。

17. 美しい鹿に変身したトリガターが、ヤーマ一行の前に現れる。珍奇な鹿の姿を見たティーダーはその鹿を欲しがる。弓を手にしたヤーマは、ここは羅刹の支配地故油断は禁物。汝は兄嫁を警護せよとレッカナに言い残して鹿の後を追う。ヤーマに矢を射られた鹿は断末魔の叫び声を発する。それはレッカナを呼ぶ声であった。悲鳴を聞いたティーダーは、直ぐに救援に向うようレッカナを促す。兄嫁の側を離れるなど兄に言い渡されているレッカナは躊躇するが、ティーダーの要求には逆らえない。ティーダーの身の回りに曼陀羅で線を引き、圈外へは出ぬよう言い残して兄の後を追う。行者に変装したダッタギリが托鉢に現れるが、呪圈の中へは入れない。邪念のないシーターが果物を持って線の外へ出たところをダッタギリに捕えられ、飛車に乗せて連れ去られる。

18. 支援に駆け付けたレッカナにヤーマが、何故来たのかと尋ねる。この鹿は矢に当たって死ぬ直前、私の声を真似てレッカナと叫んだ後、羅刹の姿に一変した。ティーダーの身の上が案じられる。庵に戻るとティーダーの姿が見えない。兄弟二人はティーダー捜索を開始する。

19. ケイタケインダの森にバーリーと言う名の猿の王がいる。その妃はターラー、息子はアウングッ（アンガダ）と言う。王には弟トウジェイ（スグリーヴァ）がいる。その妻の名はトウパッタと言う。バーリー兄弟は、二人とも体を巨大にする事ができる。猿の王バーリーは弟の妻を横取りし、弟を追い出す。トウジェイがいる木の下に、ヤーマ、レッカナ兄弟がやって来て休息する。ヤーマは弟の胸に頭を預けて居眠りする。レッカナの背中に雌鶲位の蛇が飛んで来て咬み付く。

血が流れ出るが、兄が目を覚まさないようレッカナは身動き一つしない。その深い兄弟愛に打たれて、トゥジェイは涙を流す。その涙がヤーマ王子の胸の上に落ちる。目を覚ましたヤーマは、樹上の猿に気付く。地上に降りたトゥジェイは、兄に追放された経緯を物語る。ヤーマは、トゥジェイがケイタケインダの猿の王になれるよう協力を約束する。ティーダーがダッタギーリに連れ去られる姿を目撃したトゥジェイも、ティーダーの奪還に協力を申し出る。バーリーの皮膚はオオギヤシ7本分に相当する位に分厚い。体は大きくすれば50由旬にもなると聞いたヤーマは、弓の威力を見せる。ヤーマの放った矢は、オオギヤシ7本を射抜いて戻ってくる。

20. 猿兄弟の決闘が始まる。兄弟酷似していて見分けが付かない。ヤーマは矢が放てない。トゥジェイの肛門にキンマの噛み汁を塗った後、決闘が再開される。ヤーマはバーリー目掛けて矢を射る。倒れたバーリーに、ヤーマは、不正を働いた故に汝を懲罰したと言い渡す。バーリーは、我が子アウングッを皇太子に任じるよう依頼して絶命する。

21. 一匹の雌猿が風の神パヴァナに懸想し、妊娠、出産する。生まれた子供は、15歳にして体が15由旬もあり、風と同じ速さで動く。昇って来た赤い太陽を見てコンチンナアカシアの実と勘違いし、飛び付く。阿修羅に飛び掛かられたと思い込んだ日の神は、帝釈天にその旨を伝える。帝釈天は金剛杵で打ち落とす。子猿は顎が砕け、地上に墜落して意識を失う。風の神パヴァナが抗議する。子猿は我が子なり。ヤーマ王子の家来としてティンコー王ダッタギーリ征伐に赴く任務を負っている。帝釈天は地上に降下して、子猿の顎に触れる。蘇った子猿に、帝釈天はハヌマンと命名、火、水、各種の武器に対して不死身である事を保証する。

22. 猿王トゥジェイは、5人の武将ナラ、ニーラ、カムタ、サンブマン（ジャンブーヴァン）、ハヌマンと3千6百万の猿を招集する。ティーダーが幽閉されているティンコー島は、閻浮提から百由旬離れている。猿の武将が跳躍できる距離は、ナラが10由旬、ニーラは20由旬、カムタは40由旬、サンブマンは80由旬にすぎない。ハヌマンを派遣することになる。ヤーマはティーダーの特徴を説明し、ハヌマンの身元を証明するため身に付けていた指輪をハヌマンに託す。

23. 百由旬の大海上を跳躍してティンコー島に到着したハヌマンは、体を猫位の大

きさに縮小して、夜、王城の中に入る。ダッタギリの寝室では王と王妃マンドーダリとが熟睡していたものの、ティーダーの姿は見当たらない。居眠りしている間にアショカ園の夢を見る。行ってみると、ティーダーの姿を発見。体を1指尺位に縮めて様子を窺っていると、ダッタギリが来てティーダーを口説く。ティーダーは、それを拒絶する。ダッタギリが立ち去った後、姿を現わしたハヌマンは、ヤーマ王子の使いであると告げて預かって来た指輪を渡す。ティーダーは、1か月以内にヤーマが救援に来なければ自分は助からないとハヌマンに伝言する。

24. ハヌマンは、アショカ園の樹木を根こそぎ引き抜く。皇太子のエインダセイタが駆け付け、ハヌマンを捕える。ダッタギリの面前に引き立てられたハヌマンは、取調べに答えて、我が父は風の神パワナ、母はシリンハー。主君のヤーマ王子に派遣され、誘拐されたティーダーの所在を確かめに来たと答える。ダッタギリはハヌマンの処刑を命じるが、ハヌマンには槍も刀も通じない。自分を殺したければ、ロンジー5百枚を油に浸し、それを尾に巻き付けて火を放てばよいと告げる。その通りにすると、ハヌマンは、体を縮小する。捕縛していた縄が抜け落ち、体が自由になったハヌマンは、屋上に飛び上がり屋根の上を移動する。家々が燃え上がり、王城は火に包まれる。ハヌマンは、ティーダーから頭髪7本を貰つて帰る。

25. テインコー島へ渡るために石堰の建築が始まる。蟹のガンダンが妨害する。ハヌマンが尾を差し入れて振り動かす。尾を挟んだ蟹を釣り上げると、鉢をもぎ取って糀放せよとラーマが指示する。石堰は1週間かかって完成。3千6百万の猿軍団が島に渡る。

26. ティーダー返還を要求するため、猿軍団の皇太子アウングッを派遣する。アウングッは、尾をテインコー王の玉座と同じ高さに丸め、その上に座る。ダッタギリ、激怒する。クンバカンナの息子クンバとクンバニとがアウングッを外へつまみ出す。アウングッは、二人を両脇に抱え空中高く飛び上がって振り落とす。二人とも地上に激突して即死する。

27. ダッタギリが梵天王から恵みを受けられた時、人間と猿とはその例外だとい渡された。ティーダーをヤーマ王子に返還し、和睦を結ぶべきだと弟のビビータナが忠告する。テインコー王は、汝は敵方の肩を持つのかと立腹し、平伏して

いるビビータナの頭を足蹴にする。ビビータナはティンコー島を去り、ヤーマ軍に加わる。

28. ティンコー王の皇太子エインダセイタとヤーマ王子との一騎討ちが始まる。ヤーマの放った矢は、エインダセイタの飛車を粉碎する。エインダセイタは隠遁術を駆使して体を透明にし、不可視の状態を作り出して、龍の網を投げる。網に絡まり、ヤーマが倒れる。香醉山の頂に生える薬草トゥウンナ・パッタ（黄金の葉）を、ハヌマンが採りに行く。薬草の効能でヤーマは助かり、龍の網は消滅する。不可視状態にあってもエインダセイタの姿は12年間女の顔を見た事がない人には見えるとビビータナに教えられたレッカナが、翌朝エインダセイタの姿を確認して弓で射る。射抜かれたエインダセイタ、戦死する。

29. ティンコー王、3日間護摩を焚き生贊を捧げる。3日間立てば、だれも羅刹には勝てなくなる。ビビータナの説明でハヌマンが護摩壇を破壊する。ティンコー王、睡眠中の弟クンビカンナを呼び起こし出陣させる。ハヌマンが体を60由旬の高さに拡大し、その上にヤーマが乗ってクンビカンナを射殺す

30. ダッタギリが出陣しヤーマと戦う。勝負は互角で決着が付かない。訛をビビータナが説明する。ダッタギリは、乾達婆、緊那羅、龍、阿修羅、畜生のいずれに対しても不死身だが、人間と猿に対しては適用されない。いかなる武器に対しても不死身だが、アッタサンダに対しては適用されない。水中でも溺死せず、火中でも焼死しないという3種の特権を梵天王から授かっている。ダッタギリを仕留めるにはヤーマが所有しているアッタサンダを使用すべきだ。ティンコー王は死を覚悟する。ヤーマがアッタサンダを弓に番えて放つ。ティンコー王の頭十個が切断され、ダッタギリは落命する。

31. 救出されたティーダーに貞節であったかどうか、ヤーマが尋ねる。ティーダーは火炎の中に入る。火傷一つ負わない。貞節が証明され、ヤーマ夫婦はアヨウタヤ国へ帰る。ビビータナは祖父インナガシップの承認を得てティンコー王となり、トゥジェイはケイタケインダの森へ帰る。留守を預かっていたバラタは、アヨウタヤの王位を兄ヤーマに返還する。

32. ダッタギリは頭が十個もある羅刹だと聴いた侍女達がティーダー妃に様子を訊く。ティーダー妃が竜脳香の板の上にダッタギリの顔を描いたところへ、ヤー

マ王がやって来る。ダッタギリの肖像画を見付けた王は、ティーダーはダッタギリが忘れられないのかと疑惑を抱く。懷妊したティーダーが、ヴァールミーキの庵で食べたお粥が食べたいというので、レッカナに送らせ、森の中に置き去りにする。ティーダーは、我が母は大地、我が父はザネッカ、我が夫はヤーマ。なのに、私は寄る辺なき身となったと言って嘆く。

33. ヴァールミーキの庵で、ティーダーは男児二人を出産、ローナ、クシャと命名する。成長した兄弟はバナナを栽培する。ヤーマ王が外出中、王の馬がバナナ園の中に入る。馬を取り押さえた兄弟に、馬丁が返還するよう求める。兄弟、断る。報告を聴いたレッカナがローナを弓で射る。矢が命中して氣を失う。クシャが報復に向い、レッカナを射る。ヤーマ王、兵を率いて駆け付ける。兄弟、弓を番えて迎撃する。兄弟の顔を見たヤーマ王、二人がティーダーに酷似していることに気付く。名前を聞くが、二人は答えず、ヤーマを射る。矢が命中して、ヤーマ王気絶する。二人はハヌマンを捕縛して庵へ連行する。ハヌマンは、ティーダーの前面で跪く。事情を察したヴァールミーキが現場に急行、失神しているヤーマ、レッカナに曼陀羅の水を注ぐ。意識を取り戻したヤーマ王に、少年二人の素性を行者が打ち明ける。ヤーマ王はティーダーを迎えて行く。ヤーマ夫婦にローナ、クシャの一族は、アヨウタヤへ帰る。12万年統治した後、ヤーマ王、天界に還る。ローナが王位を継ぐ。

2. ヤーマ・タージン (Rama Thagyin)

ヤーマ・タージンは、ウー・アウンピョー (U Aung Hpyo) によって書かれた韻文 (Thagyin) 形式のラーマ物語で、その梗概は、次のようにになっている。

1. 賢劫の頃、ティンコー島に羅刹の王がいた。妃に娘が誕生、ニ・ガンビーと命名する。16歳になった時、ガンビーは行者の下で持戒瞑想の生活に入る。梵天王が彼女を見初める。望みを申せ、適えてつかわすと告げる。年取った時世話してくれるような息子が欲しいと申し出る。ガンビーは、マンゴーの枝3本を折り取って梵天に捧げる。1本目の枝には実が10個なっている。2本目には巨大な実が一つだけ。3本目の枝は手が滑って落下した。洗って献上した。梵天はガンビー

の腹を3回撫で、美貌の男児3人に恵まれるであろうと述べて天界へ戻った。妊娠したガンビーは、3人の子を出産する。第1子には頭が10個あった。生れた土地の名を取ってダッタギーリ（ダシャグリーヴア）と名付ける。2番目の子にはコンビーカンナ（クンバカルナ）と命名。3番目の子は小枝を洗って差上げたところからビビータナ（ヴィビーシャナ）と命名する。

2. 成長した息子3人は、母親に父親は誰か尋ねる。母の故郷はランカーディーパすなわちテインコー島、汝等の祖父はテインコー島を支配する羅刹の王、汝等の父は娑婆世界の者に非ず、梵天界を支配する梵天王なり。説明を聴いた息子たちは、父親に会いたがる。8万年間瞑想に専念する。梵天王現われ、望みの物を与えようと告げる。ダッタギーリは、人間、天、緊那羅、羅刹の四界を支配したい。空中を自由に飛翔したい。いかなる武器に対しても不死身になりたいと申し出る。羅刹と緊那羅、二世界の支配は認める。飛車に乗り天空を飛翔する事も認める。全ての生き物からの攻撃に対して不死身であることを認める。但し、人間と猿からの攻撃は例外とする。あらゆる武器に対して不死身である事も承知する。但し、アッタサンダ（半月形の武器）だけは例外とする。巨大な体格の持主コンビーカンナは、瞑想を8万年間続けたために睡眠不足になっている。一旦熟睡すれば12年間は覚醒せぬようにと懇請する。ビビータナは、悪人とは交際せず善人とのみ交際したと希望する。全ての望みを適えて、梵天王は天界に戻る。

3. ダッタギーリは、祖父からテインコー島の王位を譲り受け、王冠十個を頭に戴く。阿修羅国王の娘マンドーグリーを妃に迎える。マンドーグリーは男子を出産。雷鳴の轟く時に誕生したのでメガナーダ（雷鳴）と命名する。メガナーダが16歳になった時、母方の祖父阿修羅王が帝釈天と戦闘する。祖父を支援したメガナーダは罠で帝釈天を捕える。その功績によりエインダジダ（インドラジット＝征帝釈天）と呼ばれるようになる。

4. テインコー城の北にアショカ庭園が作られる。そこに生えたアーターワディーの赤い実を食べた事から、ダッタギーリの言動が異常となる。持戒を怠り、飲酒酩酊し、悪行を重ねるようになる。香醉山で精進潔斎中の天女を見初めて発情したダッタギーリ、口説いて手込めにしようとする。修行を妨げられた天女は、火中に飛び込んで死ぬ。死の間際に天女は、今後ダッタギーリが女性を暴行すれば

その都度十個の頭が一つずつ落下すると呪詛する。恐怖を覚えたダッタギーリは、この地で赤ん坊が生まれれば男女を問わず捕えて差し出せと手下の羅刹に命じる。ダッタギーリの妻マンドーダリーに愛らしき女児誕生。ダッタギーリは木箱に女児を入れて海に流す。波に運ばれてウイデーハ国ミティーラーに漂着した木箱は、砂に埋もれる。ミティーラーのザネッカ（ジャナカ）王には子供がない。木箱を発見したザネッカ王、中にいた女児をティーター（シーター）と名付けて養育する。

5. アユタヤー国王ダッタラータには、コータンラー（カウシャリヤ）、トゥメイタヤー（スミトラ）、ケーケー（カイケーイー）と言う妃が3人いるが、嗣子には恵まれない。ダッタラータ王は帝釈天が阿修羅王と戦った時帝釈天を支援してタッタウエーディと言う武器を授かる。無事に帰還したものの健康を損ねた王をケーケー妃が介抱する。回復した時、王は妃に望みの品を与えると約束する。ケーケーは必要な時に頂戴しますと返事する。

6. 神与の武器を試しに森へ出掛けたダッタラータは、水の音を聞いてチャクラ（輪盤）を放つ。チャクラは盲目の親を扶養している少年行者に命中する。少年は、親を残して先に死ぬ無念さを口にする。王は少年の両親に起った出来事をありのままに語る。盲目の夫婦は、我々は子を思って死ぬ、王もまた自らの子を思って死ぬ事になると口走る。余は子宝に恵まれないと語る王に、夫婦は、庵から1由旬離れた所に頭髪を3層に結髪した行者が居る。名をトリスーラと言う。その行者に会うようにと勧めて息絶える。

7. 行者を訪れた王は、子宝の授かり方を尋ねる。行者は熟したバナナを2本、王に渡す。城に帰った王は、持ち帰ったバナナをコータンラー妃とトゥメイタヤー妃とに1本ずつ渡す。妃二人は自分のバナナをケーケー妃に半分ずつ分け与える。バナナを食べた妃は3人とも妊娠、コータンラーはヤーマ（ラーマ）王子、トゥメイタヤーはタッタルガナ（シャトルグナ）王子、ケーケー妃はレッカナ（ラクシュマナ）、バラタ両王子を出産する。分け与えたバナナの関係で、4人の王子の内、ヤーマとレッカナ、タッタルガナとバラタの2人が仲睦まじい。ヤーマ王子が12歳の時帝釈天が現われ、宿敵征伐のための武器アッタサンダを与える。ヤーマは、行者の庵を荒らすカラスのカーカウンナを退治する。

8. ミティーラーのザネッカ王が砂浜で発見して育てたティーター姫に、闇浮提の王百人が求婚する。苦慮したザネッカ王は、自在天から授かった千人力の大弓を引き得た人に姫を嫁がせると宣言する。自分が海に流した女兒がミティーラーの王に養われ美女に成長した事を知った十頭のダッタギーリは、神与の弓が闇浮提の人間に引ける筈はない。余が手に入れると豪語して飛車に乗って飛来する。参考した王百人は、神与の弓を引くどころか持ち上げる事さえできない。ダッタギーリは、よろめきはしたものの弓を持ち上げる事はできた。しかし弓に矢を番える事はできない。しかし、参加した百一人の中で一番の強力の持主であることは事実。ザネッカ王はダッタギーリを婿と決定すべきだと、ダッタギーリは主張する。百人の王達、肅として声も無し。されど、人間と羅刹とは異類なり。行者の後で話を聞いていたヤーマ王子、居たままれず飛び入りを申し出る。王宮の窓を開けて様子を見ていたティーターも、成功を祈願する。ヤーマ王子、弓を引く。弓は真二つに折れる。群衆、皆驚く。ダッタギーリは冠を被る事すら忘れて逃走する。ダッタラータ王の下に知せが届く。王は王子3人を伴い、ミティーラーを訪れる。ヤーマはティーターと、ヤーマの弟3人はザネッカ王の姫3人とそれぞれ結婚して、アユタヤへ帰る。

9. アユタヤの王位はヤーマ王子に譲るべきなれど、ダッタラータ王が前にケーケ妃に与えた約束に基づいてバラタ王子に与えるべきだ。ヤーマは12年間森で過ごさるべきだとケーケーが要求する。父親の約束である以上破るわけにはいかないと、ヤーマは妻ティーターと末弟レッカナを同伴して森へ赴く。ダッタラータ王崩御する。バラタ王子が兄のヤーマ王子に帰国を要請するが、約束の年月が経つまでは汝が国政を担当すべしと言って靴を渡す。バラタ王子、王都へ引返す。

10. 十頭の持主であるテインコー王ダッタギーリには、妹ガンビーがいる。一身三頭なのでトリガタとも呼ばれる。ガンビーには、カラ、ドゥタラ（ドゥシャナ）と言う息子が二人いる。ダッタギーリは、妹親子3人に封土としてフモーヨン（雪山）の森を与えていた。その森へやって来たヤーマ王子一行、この森には動物の気配が感じられぬ。妖怪変化の巣窟に違いないと緊張する。4刻過ぎて3人の前に、カラとドゥタラが現れる。眼はシンバルの如く大きく、髭むじやらで、口からは牙が突き出ている。二人は咆哮する。我等はテインコー王の甥なり。こ

こを何処と心得る。この森に入りたる生き物は悉く食い殺す事可なりとの勅許を、我が母はティンコー王より得ている。ここ一週間ばかり餌にありついていない。早速、汝らの肝と腸とを油炒めにして食うことにしてやう。さぞ旨かろう。レッカナが立上がり、弓を構える。ヤーマは帝釈天から授かったアッタサンダ弓を引き、矢を放つ。矢はカラ、ドゥタラの胸を貫通して舞い戻って来る。羅刹女のガンビー、息子二人の死を知って落涙。縄張の中で我が子が殺された。このままで済まさぬ。

11. ティンコー島へ飛んだガンビー、泣きながら兄ダッタギーリに訴える。激怒したダッタギーリ、相手の人数を訊く。3人のみ。一人は丸腰、もう一人は剣と小さな弓を持つだけ。他に女が一人。判った。アユタヤ国王ダッタラータの子ヤーマだ。弓を持つのはその弟レッカナ、女はミティーラー国王ザネッカの娘ティーターなり。ダッタギーリ、恐怖に怯える。弓を引いた者に姫を与えると言われて引いたが、余は失敗した。なのに、ヤーマは成功した。余は呪文を唱えて逃げて来た。半年以上も恐怖で眠れなかった。そのせいで体調も良くなかった。朝晩薬を飲んでやっと回復したところだ。ガンビーが提案する。私に名案がある。私が金の鹿に変身する。それを見たティーターが捕えてくれとせがむ。私は二人を遠方へ誘い出す。その間にティーターを拉致すればよい。

12. フモーヨンの森に着いたガンビーは金の鹿に変身して人目につく所を行ったり来たりする。鹿の姿を見たティーターは、金の鹿とは珍しい。今までに見た事も聞いた事もない。城に帰った時、皆に見せたいと言う。ティーターの警護をレッカナに委ねて、ヤーマが鹿の後を追うがなかなか捕まらない。ヤーマは弓を射る。矢はガンビーの胸を貫く。瀕死のガンビーは、ヤーマ王子の声を真似て「弟よ」と絶叫する。その声を耳にしたティーター、レッカナを応援に行かせようとする。ティーターの身に回りに呪圈を三重に張り巡らせたレッカナは、絶対に圈外に出ないよう忠告して兄の後を追う。

13. 羅刹王ダッタギーリ、麻衣を身にまとい杖を突いて現れる。森での暮しも既に50年になる。どうか果物をお恵み下されと懇懃に乞う。呪圈を越えて中に入れれば進呈するとティーター答える。呪圈を越えれば行者は死ぬ。果物を抱えて圈外に出たティーターをダッタギーリ、捕える。余を本物の行者と思ったのか、余は

テインコーの王なるぞ。ミティーラーで見掛けた時はふっくらとしていたのに、今は哀れなり。丸太を枕、粗い麻を寝具代わり、履いている草履は穴だらけ。香水とて満足に無い。十個の口を開けて異口同音に語ったダッタギーリ、ティーターを飛車に乗せテインコー国へ拉致する。

14. 羅刹女を射殺したヤーマ王子、帰る途中で弟レッカナに出会う。兄嫁の警護を命じていたのになぜ追ってきた。助けを呼ぶ兄の声が聞えた。ティーターに救援に行くよう指示された。呪圈を三重張り巡らせて来た。呪圈を破れる者は四大洲にはおりませぬ。叫んだのは余に非ず。鹿の前身は羅刹なり。矢に射抜かれた時の悲鳴を汝は聞き間違えた。庵に取って返す。ティーターの姿、見当たらず。樹下に果物、散乱せり。誰かに誘拐された事は疑いない。フモーヨンの森を捜索するが見付からぬ。望みなし。ヤーマ王子、悲嘆に暮れる。

15. ケイタケインダ（キシュキンダ）の森には猿兄弟のバーリーとトゥジェイがいて、権力争いをしている。トゥジェイは猿王の正妻の子、バーリーは後妻の子である。バーリーがトゥジェイに謀反を起す。その妃を奪い玉座を手に入れる。トゥジェイがいるセイロンオークの樹下に、ヤーマ兄弟がやって来て休息する。ヤーマは弟レッカナの懐に頭を預けて居眠りする。牝鷄位の虻がレッカナの背中を咬む。出血するが、兄の安眠を妨げないようレッカナは身動き一つしない。睦まじい兄弟愛を目撃したトゥジェイ、思わず落涙する。冷たい水滴で目覚めたヤーマ、羅刹の仕業かと思って弓を構える。痩せ衰えて恐怖の表情を浮べた猿を樹上に見掛ける。弓を下ろすと、猿が降りて来て身の上を語る。自分は、ケイタケインダ国の頭領メッカタ・ヤーザー (*Makkata rājā*) の嫡男である。南宮妃の子で、猿族の正当な後継者である。赤毛の兄がいるが、兄は後妻の子である。父の死後兄が腕力で王位を奪い、我が妃まで奪った。私に暴力を振うのでセイロンオークの樹上で難を避けっていた。今日で4か月経つ。

16. ヤーマも、身の上を語る。自分の名前はヤーマ、アヨウタヤ国王ダッタラーの嫡子である。母は北宮妃コータンラー。妻は木箱の中から見付かったティーター姫。フモーヨンの森で金の鹿を追っている内に姿が消えた。誰に誘拐されたのか見当さえつかない。話を聞いたトゥジェイ、ティーターを飛車に乗せて連れ去るテインコー王ダッタギーリの姿を目撃した事を思い出す。雲間から「助けて」

と言う悲鳴がひっきりなしに聞こえるので見上げると、テインコー王が飛車に乗って東方から飛来した。ダッタギーリの冠十個が光り輝いていた。人妻をさらって来るなんて、その夫が追つとり刀で駆け付けるぞ、何処に逃げ隠れするつもりかと怒鳴った。羅刹は外道である。退治しなければならぬ。我々猿族は3千6百万いる。テインコー島へ渡るには橋が必要だ。海岸で待ちなされ。その前にバーリーを制裁しなければならぬ。このセイロンオークの南西3タインの所にケイタケインダの王宮があり、赤毛猿のバーリーはそこにいる。腕力が強く、体の皮膚はオオギヤシ7本分の厚さがある。ヤーマ兄弟、トウジェイと共にケイタケインダ(キシュキング)に行く。

17. トウジェイの挑戦に激怒したバーリー、一騎討ちを始めるが、兄弟酷似しているため区別が付かない。決闘は小休止後再開される。バーリー目掛けて射たヤーマの矢がバーリーのみぞおちに命中する。身動きのとれないバーリー、椰子の木7本分もの厚さがある我が皮膚を射抜くとは、誰の仕業かと訝しがる。私はアヨーディヤー国王の皇太子ヤーマなり。不正を働いた者は容赦しないのが余の信念。汝は悪行の報いを蒙った。観念せよ。死ぬ事は厭わぬ。後に残る我が子アウンゲッの事が心残りだ。皇太子に任じて欲しい。心得た。矢を引き抜くと鮮血が滴り落ちてバーリーは絶命する。

18. 3千6百万の猿軍団が、ランカー島を目指して進軍する。総司令官トウジェイ(スグリーヴァ)、副官ザブマン(ジャンブヴァン)、先陣指揮官アウンゲッ(アンガダ)、マンバラーバ、参謀ナラ、ニーラ。ティーターの生死の確認と敵情視察のために斥候を派遣する事になる。百由旬もある広大な海を目の前に、全員途方に暮れる。武将達に跳躍できる距離は、ガモウタが40由旬、ウンシュエ50、メッカタナーラダ60、ナラン70、アヌーパタ、アヌーヒタ、アヌカマは80で、いずれも百由旬に届かない。

19. ザブマンが申し出る。斥候として適任者あり。父は風の神、母はケイタケインダ森の牝猿。16歳の時にキラキラ輝く太陽を完熟したヤサイカラスウリと勘違いして飛び付き、帝釈天に金剛杵を投げ付けられて顎が砕けたものの、風の神の嘆願で蘇生、不死身を約束された。その名はハヌマン。フモーヨンの森で乱暴狼藉を重ねているが、ヤーマ王子のために奉仕させるがよい。召喚されたハヌマン、

任務を遂行する旨誓う。ヤーマの指輪を預かったハヌマン、跳躍して日没直前にテインコー島に到着、片足で地上に降り立つ。

20. テインコー王城の城壁は鉄製、望楼や尖塔を備える。城内には家屋9千万あり。城外も同じ。王城の門外は殷賑を極める。ハヌマン、猫のように変身して城内に忍び込む。侍女達誰も疑わず。本丸に入る。頭が十個、口も十個、耳は20付いた羅刹が寝台にいる。羅刹の頭領だ。その隣にいるのは阿修羅王の娘マンドーグリー。城外に出て、市街地を見て歩く。しかし、ティーターの姿はどこにも見当たらない。探し疲れて望楼上り、一寝入り。庭園の夢を見る。庭園内は調べていない。早速行ってみる。仮住いがあり、多勢の羅刹女達が警備している。中央に憂い顔の女性一人。ヤーマ王子に聞いた容貌そっくり。王宮内の女官たちとは比較にならぬ気品がある。ティーターに違いない。

21. そこへ、十個の頭に王冠を十個被ったテインコー王が現れる。十個の口を一斉に開いてティーターに語り掛ける。余は並の羅刹にあらず。大梵天王の嫡出子3人の中の長子なり。余の妃になってくれれば幸せを約束する。ティーター、断る。たとえ太陽が西から上ったとしても、私は背信行為はしない。我が夫ヤーマは無双の力持ち、そなたの頭十個はアッタサンダー一つで切斷できる。今月一杯は生かして置くが、このまま強情を張れば灼熱の釜の中で釜茹でにし、内臓をひきずり出して油炒めにして食ってやる。

22. テインコー王が立ち去った後、アショカの木の葉からハヌマンが顔を出す。姫の安否を確かめるため派遣された者なり。ヤーマ王子は姫救出のため石橋を築く用意をしている。ティーター、信用しない。私は凡人に非ず。風の神の子なり。お疑いならこの指輪を御覧あれ。樹下に降りて指輪を渡す。私の命は今月一杯。一週間以内に救出するよう王子に伝えておくれ。

23. ハヌマンは、庭園内の樹木を悉く押し倒し引き抜く。猿が一匹、果樹園を荒し回っているとの報告を受けたダッタギリ、皇太子のエインダジタに捕獲を命じる。取り押さえに来た羅刹兵士を相手に大暴れしたハヌマン、このまま引き返せば敵情が判らぬと自ら縄にかかる。ティンコー王の前に引立てられ、何者か、何が故に庭園を荒したと尋問されたハヌマン、3千6百万の猿軍団が海岸で待機している。命が惜しくば即刻ティーターを引き渡し、命乞いをしろ。さもなくばテ

インコー全島が破滅すると言い渡す。激昂したダッタギリ、直ちに処刑せよ。肉は油炒めにし、腸は茹でよ、骨は酢漬けにせよ。久し振りの肉料理だ。猿の手足を縛って外へ連れ出し、刀や斧、槍などを使って切ったり突いたりするが、一向に平氣である。無傷のままで、出血さえしない。某を殺したければ、ロンジーを油に浸して尾に巻き付け火を点けたらよい。ダッタギリ、言われた通りにする。屋上に飛び上がったハヌマン、家々の屋根を渡り歩く。市街地全焼する。

24. ティーターの連れ帰りを指示されていないハヌマン、ティーターの頭髪を預かりヤーマの下へ帰る。報告を受けたヤーマ、石橋築造を決意する。猿集団が工事に取り掛かる。4日間で完成するが、沖合1由旬位の所を大蟹が破壊する。海中に潜ったハヌマン、大蟹を取り押さえ引き上げるよう尾を振って合図する。引上げた蟹の鉗をもぎ取って釈放する。復旧された橋を猿軍団が進撃開始、日没前にティンコー島に到着する。

25. 猿軍進撃の報告を聞いたティンコー王のダッタギリ、迎撃態勢を取る。血氣に逸る武将達を抑えたヤーマ、戦闘が始まれば猿軍からも羅刹軍からも死者が出る。ティーターの返還か戦闘か二者択一を迫るよう、使者としてアウンゲッを派遣する。城内に入ったアウンゲッ、尾を丸めて1尺程の高さにしてその上に座る。非礼千万な猿奴、何者なりや。ティンコー王は口を十個開けて怒号する。我が名はアウンゲッ。かつて汝が飛車にて飛行中、ケインダ国王バーリーの頭上を通過した。バーリーは雲間を追い掛け、汝を脇に挟み海中に8回飛び込んだ。勘弁してくれと汝が謝ったので許した。その赤猿バーリーこそ我が父なり。汝が恐れた我が父はオオギヤシ7本分の厚さの皮膚の持主であったが、ヤーマ王子に制裁された。汝とて同じ運命。命が惜しくばティーターを輿に乗せて差し出すべし。ティンコー王は豪語する。汝らはこの島へ來るのに石橋を築かねばならなかつた。汝が今話をしている相手を誰だと心得る。飛車で自由に空中を飛翔できる特殊な能力の持主だぞ。この島へ侵入した猿達が無事に帰れるとでも思っているのか。両者のやり取りを聞いていて怒ったクンビ、カンナの兄弟二人、アウンゲッの腕をつかんで城外へ引きずりだす。アウンゲッは二人を小脇に抱え空中高く飛び上がって振り落す。二人の体は地上に激突し、四散した。

26. 弟のビビータナ、ダッタギリに忠告する。兄君が梵天王に不死身の特権を付

与された時、人間と猿だけは例外だと言い渡された。今回の相手ヤーマとレッカナは人間だ。それに猿の大軍。アッタサンダまで所持している。ティーターを引き渡せば友好関係が結べる。今が好機だ。同じ血を引いた兄弟でありながら、敵方の肩を持つつもりか。ダッタギリは、将兵達の面前でビビータナの頬を平手打ちにし、靴で殴り付ける。王宮を退出したビビータナ、ヤーマの軍勢に合流する。猿軍団、テインコー王城を包囲する。

27. テインコー王、エインダジタに出撃を命じる。ヤーマ、レッカナを生捕りにし、首を差し出せ。我が王城を焼き払ったハヌマンは、羅刹の将兵達に引き渡せ。残りの猿は、肉料理にして羅刹達に分配せよ。夜明けと共にエインダジタ、城の東に出撃する。迎えるヤーマと一騎討ちを始める。エインダジタ、槍を90本、百本と繰り出す。猿軍後退。ヤーマ立ち上がって矢を射る。エインダジタ、飛来する矢を刀で切り伏せる。羅刹軍後退。インダジタ、火の雨を降らせる。一千万の猿軍、堪らず退却する。トゥジェイ、ザブーマン、ハヌマン等、弓矢百本を一斉に射る。インダジタ、空中に飛び上がり雲間に隠れる。下界からは見えない。夕方、インダジタは龍の網を投げる。網に絡まったヤーマは、人事不省に陥る。南方や西方に布陣していたレッカナやマンバラーバ、アウングッ等が駆け付ける。しかし、手の施しようがない。翌朝までには絶命するとみたインダジタ、城中へ引き上げる。

28. ザブマンが提案する。ガンダーマダナ（香酔山）の薬草トゥウンナパッタ（金の葉）が3枚あればヤーマ王子は助かる。但し日光に当れば網は外せなくなるから、夜明け前に薬草を持ち帰る必要がある。ハヌマンが香酔山に向う。日が暮れているため金色は矢せている。薬草は見付け出せない。体躯を1ガーウォウ（牛呼）の大きさに拡大したハヌマン、山の頂を剥がし脇に挟み込んで持ち帰る。ヤーマ王子、やっと昏睡から覚める。

29. 猿軍団は夜明け前にランカー城を包囲するが、インダジタは隠遁術を使って身を隠している。ビビータナの説明では、インダジタの姿を見るには過去12年間女性の姿を目にした事がない人間に限られると言う。帰国できるまでは女性の顔は見ないと決意し、過去12年間兄嫁の世話をしてきたもののその顔を見ていないレッカナが、飛車に乗った羅刹の姿を雲間に発見、その位置を兄ヤーマに教える。

ヤーマは弟の指差す方にアッタサンダ矢を射る。矢はインダジタの頭を切断する。インダジタは地上に落下して絶命する。

30. 我が子の死に衝撃を受けたダッタギリは、睡眠中の弟ケンビーカンナの起用を思い付く。12年間に1度しか目覚めぬよう梵天王に保証されているため、ケンビーカンナを起すのは至難の技である。ようやく起き上がったケンビーカンナは、包囲していた猿を捕え百匹、二百匹単位で丸呑みする。ヤーマが矢を射る。矢はケンビーカンナの頭と四肢とを切り裂く。山のような巨体の持主ケンビーカンナも絶命する。

31. 頼りとする肉親を次々に失った羅刹王は、生贊の秘儀を執り行なう。牛、水牛、山羊、豚、鶏などが祭壇に捧げられる。7日間続いた秘儀が終了すれば、鉄壁の防備が完成すると言うビビータナの説明を聞いたヤーマ、アウングットハヌマンを差し向け秘儀を妨害させる。護摩壇に乱入した二人は、排泄物で護摩を消滅させる。夜明け、帝釈天と見紛う衣装で身を飾ったダッタギリが前線に赴く。ヤーマとの間で死闘が繰返される。弓、槍、刀、金剛杵、あらゆる武器が使われる。ダッタギリが投げた龍の網にヤーマ絡まり失神する。ハヌマンが薬草を取って来て治療する。ビビータナが、羅刹王にはアッタサンダー以外の武器は通用しないと提言する。ヤーマ、神与の武器アッタサンダを弓に番える。飛車の上に仁王立ちになっていたダッタギリ、アッタサンダを目にすると飛車を降りて土下座、両手を合わせて命乞いをする。庭園に生えたアーターワディーを口にして、その余りの甘さに病み付きとなり、良心を失った。今後は誠心誠意ヤーマに奉仕しますと涙を流して誓う。汝の運命もこれまでだ。天界への再生を念じろと申し渡す。ダッタギリ空中に逃走するが、ヤーマの放ったアッタサンダが首筋に命中、王冠十個が飛散しダッタギリの頭は一斉に地上に落下した。

3. アラウン・ヤーマ・タージン (Alaung Rama Thagyin)

アラウン・ヤーマ・タージンは、ビルマ語のアラカン（ヤカイン）方言を使用したラーマ物語である。ヤーマ王子は菩薩とされ、「殺生戒」、「四悪趣」と言った仏教用語が使われている。物語の梗概は次のようになっている。

1. ランカー島の女夜叉が娘を出産する。娘メー・ゴンビーマは成長して行者となり8万年修行する。子宝を望む夜叉の前に梵天王が現れ、右手で臍の回りを撫でる。夜叉はマンゴーの枝3本を折り取って梵天王に奉納する。妊娠した夜叉は男児を3人出産する。長子には頭が十個ある。口も十個あり目は20ある。名前はダッタギーリ（ダシャグリーヴア）と付ける。第二子の名前はゴウンビガンナ、第三子にはビビタナと付ける。成長した3人は、父親に会いたがる。母親の血を毎日浴び続けたところ、天界から梵天王が降下して来る。
2. 梵天王は、子供達の望みを適える。長兄ダッタギーリは半月形の武器アッタサンダ（Addha Canda Cakra）を授かるが、人間と猿とは敵にまわすなど警告される。兄弟3人帰国する。
3. 十頭の夜叉ダッタギーリ、祖父から王位を引き継ぎ、阿修羅王の娘マンダニを妻に迎える。子供が生まれ、エインダセイタ（インドラジット）と名付ける。ダッタギーリ、乾達婆の娘を手込めにする。娘はダッタギーリを呪い、火中に飛び込んで焼身自殺する。ケイタケインナー（キシュキンダ）国のトゥジェイ（スグリーヴア）と弟バーリー、頭上を飛翔するダッタギーリを追い掛け、引きずり降ろす。
4. アルッタラ国王ダッタラタには、3人の妃コータンラー（カウシャリヤ）、トゥメイター（スミトラ）、ケーケー（カイケーイー）がいる。須弥山の頂で行なわれた帝釈天と阿修羅王との戦闘で、ダッタラタは帝釈天を応援する。勝利を得た帝釈天から、ダッタラタは武器チャクラを授かる。指に怪我をしたダッタラタを王妃ケーkeeーが治療する。武器の威力を試している内に、ダッタラタは誤って盲目夫婦の子を殺してしまう。
5. 嗣子のいないダッタラタは、王子誕生を祈願する。行者に貰ったバナナ2本の内、1本はコータンラー妃に、もう1本はトゥメイター妃、ケーkeeー妃に半分ずつ分け与える。乱行の続く十頭の夜叉を退治するため兜率天の菩薩が帝釈天の要請でコータンラーに託胎する。生まれた王子にヤーマ（ラーマ）と命名。続いて生まれた弟3人は、レッカナ（ラクシュマナ）、ワルンナ（シャトルグナ）、パドラ（バラタ）と命名される。
6. メイティーラー国王ザネッカ（ジャナカ）、始耕祭で箱を鋤に引っ掛ける。

蓋を開けてみると女児が入っている。河畔で発見された事からティーダー（シーター）と命名する。成長したティーダーに関して弓の競技が行われる。参加したダッタギリ、膝まで弓を持ち上げたものの失敗。ヤーマ王子成功する。

7. ティーダーと結婚したヤーマ、弟レッカナと共に故郷へ帰る。帰途、バシューヤーマ（パラシュ・ラーマ）に挑戦されるが、これを斥ける。

8. ダッタラッタ王の後継者としてのヤーマ王子の即位にケーケー妃が反対。自分は、阿修羅と戦って怪我をした国王の小指を口で吸って膿を飲み込み治療した。その時国王は望みの褒美を取らせると約束した。その約束を果して欲しい。ヤーマ王子に森で12年間暮らすよう要求する。ヤーマ王子、妻ティーダー、弟レッカナと共に王城を出てモーヨンの森に入る。

9. 事情を知ったバドラ王子、兄ヤーマを呼び戻すため森へ向う。ヤーマは身代りに靴を渡し弟を帰国させる。

10. 猿のハヌマン、風の神を父親として生れる。

11. 猿の王トゥジエイ（スグリーヴァ）、水牛と戦う。猿王の兄弟仲違いをして相争う。勝った弟バーリーが兄トゥジエイを追放する。トゥジエイは樹上で暮す。

12. 夜叉女メー・ガンビーが、グンボー・デーワと交接して、息子二人ドウタとカヤを生む。森に入ったヤーマ一行を夜叉兄弟が襲う。無用の殺生はしたくない。立ち去れと促すヤーマ等に、夜叉兄弟は尚も脅迫を続ける。ヤーマ、夜叉二人を弓矢で射殺す。

13. ドウタ、カヤ兄弟が帰って来ない。不吉な予感を感じた母親ガンビーは、モーヨンの森へ探しに出掛けて、二人の遺体を発見する。報復を誓ったガンビーは、兄ダッタギーリの下に駆け付け、涙を流しながら報告する。

14. 金の鹿に変身したガンビー、復讐のためヤーマをおびき出す。ヤーマは弟に兄嫁の側を離れないよう注意して鹿の後を追う。矢を射られたガンビー、夜叉の姿に戻るがヤーマの声を真似てレッカナを誘い出す。レッカナは三重の呪圈を設定、圈外に出ぬよう警告して兄の救援に向う。ダッタギーリ現われ、ティーダーを誘拐する。猿王トゥジエイがそれを目撃する。

15. ヤーマ、レッカナ兄弟、ティーダー搜索に乗り出す。疲労した二人は、トゥジエイのいる樹下に来て休息する。ヤーマはレッカナにもたれて居眠りを始める。

レッカナを蛇や蚊が襲って刺す。レッカナ、身動きしない。トウジェイ、落涙する。ヤーマ、目を覚ます。トウジェイ、弟バーリに王位を奪われ追放されたと身の上を語り、ティーダーから預かっていた手紙をヤーマに渡す。トウジェイとバーリとの決闘が始まる。兄弟の区別をするため、トウジェイの尻にキンマの噛み汁を塗る。

16. ハヌマン、ティーダーの所在確認に出掛けることになる。ヤーマ、ハヌマンと同じバナナの葉を使って食事を取り、証拠の品として自分の指輪を託す。ハヌマンは猿に変身して城内に入り、ティーダーに会う。その後、庭園を荒してエインダジタに捕まる。ハヌマンの処刑執行。いくら刀で斬っても切れない。油に浸した布をハヌマンの体に巻き付け火を付ける。火の付いたハヌマンが走り回り、テインコー市街焼失。ハヌマンはティーダーの毛髪十本を預かってヤーマ王子の下へ帰る。

17. ヤーマ、テインコー国へ渡るため石垣を築く。大蟹のマハーガンダッマが石垣工事を妨害する。ハヌマン、海底に潜って大蟹を捕え鉄をもぎ取って放免する。テインコー国へ渡ったヤーマ、アウングッを派遣してダッタギーリに最後通告を突き付ける。

18. ダッタギーリの弟ビビタナ、梵天の戒めを引用して兄にティーダーの返還を勧める。激怒したダッタギーリ、弟を追放する。エインダジタ出撃し、蛇縄を投げる。蛇縄絡まり、ヤーマ失神する。ハヌマン、ガンダマーダナ（香酔山）から蘇生薬を持ち帰る。雲間に隠れたエインダジタの姿は、女の顔を12年間見た事がない者でなければ見えない。該当する者はレッカナ唯一人。レッカナの指示で、ヤーマ弓を射る。エインダジタ戦死する。

19. 超能力獲得のためダッタギーリが、護摩を焚く。その護摩壇をハヌマンが妨害する。ダッタギーリ出陣する。レッカナの協力でヤーマ、弓を射る。ダッタギーリ落命する。

20. ヤーマ王子、ティーダーの身の潔白証明を要求する。ティーダー、火炎の中に飛び込む。火傷一つせず貞節であったことを立証する。二人はアルッタラへ帰還する。ヤーマ、石垣の取壊しを命じる。ヤーマ王子、アルッタラで灌頂式を行ないティーダーを皇后に迎える。他人の慰み物を頂戴したとの噂が立つ。

21. ダッタギーリの妹トゥセイタ、兄の仇打ちをするため田舎娘に扮して王宮に仕える。侍女となったトゥセイタ、ティーダーにティンコー王の姿を描いてくれるよう要望する。外出から帰ってきたヤーマ王、板に描かれたティンコー王の肖像を見てティーダーを追放する。
22. ヴァールミーキ行者の庵に辿り着いたティーダー、そこで一子ローナを出産する。洗濯に出掛けたティーダー、子猿を抱いた母猿の姿を目撃する。不安になったティーダー、庵に取って返し我が子を抱き上げて洗濯場に連れて行く。目を覚して幼児がいない事に気付いた行者、タマン草（インドキチジョウソウ）に命を吹き込みグシャを創造する。成長した二人は、学識、武芸に秀である。
23. アルッタラ国を統治しているヤーマ王、貢物が届かぬため、馬の首に貢納要求の文を吊し諸国を巡らせる。ティーダー母子の住む庭園のそばに白馬が現われる。駆け回る白馬を、少年二人が取り押さえる。武将達は馬の返還を要求する。少年二人、取り合わない。報告を聞いたヤーマ王、レッカナ同伴で現場に駆け付ける。少年二人の容貌はヤーマ王に酷似している。身元を尋ねるが二人は答えない。
24. 親子間で戦闘が始まる。ヤーマ王が投げ付けた刀は、少年たちの目の前で食べ物に一変する。少年たちが投げ返した刀は、ヤーマの目の前で花に一変する。グシャはダッタギーリの再来。行者がタマン草を手に持つ。グシャがそれを投げると武器となってヤーマに命中する。レッカナ落胆する。少年二人の身元が判明。親子と分り、少年達は武器を捨てる。レッカナ、少年達の母親の所在を尋ねて庵に向う。レッカナ、ティーダーの姿を見て落涙する。瀕死のヤーマ王の傷口に、ティーダーが差出した秘薬を塗る。ヤーマ王、回復する。父の誘いで少年二人は王宮で暮らすことになる。しかし、ティーダーは同行を断る。行者がティーダーに同行を勧める。行者の勧告に逆らう事はできぬ。ティーダー、王宮へ同行する。ヤーマ王、ティーダーを皇后として迎える。

4. ヤーマ・ヤガン (Rama Ragan)

ヤーマ・ヤガンは、ウー・トー (U Toe) によって詠まれた韻文 (ヤガン) 型

式のラーマ物語である。その梗概は次のようになっている。

1. アヨウタヤ国のヤーマ（ラーマ）王子は菩薩、体はエメラルド色をしている。カカウイン鳥を退治し行者の元で修行をする。
2. ランカー島の羅刹王ダッタギーリ（ダシャグリーヴァ）は梵天の子なれど、頭十個の持主。妻のマンダダリーとの間に生まれたティーダー（シーター）姫を、鉄の函に密封して海に流す。メイティーラー国（ジャナカ）のザネッカ（ジャナカ）王が発見して養育する。
3. 成長したティーダー、顔は太陽のごとく輝き、腰は蛾の如し、目撃した者は悉くその美しさを噂し合う。諸国の王より求婚の申し込み、引きも切らず。贈られた貢物、山の如し。中でも、デーワダハ国（デーワヤーザ）の王、余は白象九頭の所有者なり。姫を所望致す。よもや断る所存に非ざるべし。姫を寄越さぬ時は武力を持って攻撃いたすとの書簡をメイティーラー国に遣わす。ティーダー姫の美貌を耳にしたテインコー王ダッタギーリ、腕力に掛けても手に入れんと決意する。
4. ザネッカ王、大自在天より拝領した神弓を引いた者にティーダーを嫁がせると布告し、諸国の王百人を弓の競技に招聘する。テインコー王ダッタギーリも王冠十個を被り、飛車にのって参加する。競技では参加者一人が三回ずつ弓を引く。
5. ヤーマ、レッカナ両王子が、行者に同行して弓の競技の見物に出掛ける。競技見物にティーダー姫、現われる。参加した諸国の王百人、ティーダーの姿にどよめく。弓を四度引いたダッタギーリ、ティーダーの引き渡しを要求する。頭が十個あるダッタギーリの姿を見て、ティーダー怯える。
6. ヤーマ王子、競技への参加を申し出る。ヤーマの出現を参加者全員が嘲笑する。反発したレッカナ、ヤーマのために祈る。ヤーマ、弓を引く。全員驚愕する。ダッタギーリは恐れをなして逃走する。ヤーマの成功をティーダー喜ぶ。ザネッカ王、ヤーマの力量を賞賛する。ヤーマ、素性を明かす。
7. 両親の出席の下、ヤーマとティーダーの結婚式が挙行される。新婚夫婦、故郷アヨウダヤーへ帰る。帰途バシューヤーマ現われヤーマに挑戦するが、敗北する。
8. 侍女のコウパシーに唆されたケーケー姫、バラタ王子の即位を要求する。ヤー

マ王子、フモーヨンの森に入る。ティーダーとレッカナが、同行する。

9. フモーヨンの森の支配者ミ・ガンビーの息子二人ドゥタとカヤ、ヤーマー一行を恫喝する。ヤーマとレッカナ反論し、羅刹兄弟との間で戦闘が始まる。レッカナ、矢を射る。ドゥタとカヤ、絶命する。ヤーマー一行、旅を続ける。

10. フモーヨンの森に現れた羅刹女ミ・ガンビー、息子二人の死体を目にして慟哭する。遺体を埋葬したミ・ガンビー、ヤーマー一行への復讐を誓う。

11. テインコー島へ向ったミ・ガンビー、ヤーマー一行に制裁を加えるよう泣きながら訴える。ヤーマの名前を聞いただけで悪寒がすると言って、ダッタギーリはヤーマとの決闘を拒否する。ダッタギーリの姿勢をガンビーマが非難する。二人の間で口論が起る。

12. ガンビー、金の鹿に変身する。ヤーマ、その鹿を追跡するが捕まらない。ヤーマ、矢を射る。ガンビー、悲鳴を挙げる。「弟よ、助けてくれ」と聞える。その悲鳴を聞いたティーダー、義弟レッカナに救援に赴くよう命じる。レッカナ断るが、ティーダーは汝が行かねば私が行くと強硬。レッカナはティーダーの回りに七重の囲いを施して出掛けた。

13. ヤーマ、レッカナ兄弟、ティーダー搜索の旅に出る。疲れた二人はセイロンオークの樹下で休憩する。ヤーマ、居眠りを始める。牝鶏位の大きさの蛇がレッカナの首筋に咬み付く。血が流れ落ちるが、レッカナは兄が目を覚まさないよう身動きしない。

14. ヤーマ兄弟の姿を見たトウジェイ、同じ兄弟とは言っても我々とは違う。自分は妻バッターを奪われ、財を没収され、追放された。トウジェイの流した涙がヤーマの胸の上に落ちる。目を覚ましたヤーマ、樹上を見上げ、トウジェイの姿を認める。弓を取って矢を番え、汝は何者なりやと誰何する。樹上から降りたトウジェイ、一部始終を語る。

5. その他のビルマ語版ラーマ物語

以上四点のラーマ物語の他に、ビルマには(1)「マハーヤーマ物語」、(2)「ティーリ・ヤーマ」、(3)「ポンドー・ヤーマ芝居」、(4)「ヤーマ三種本生物語」、(5)「ポ

ンドー・ヤーマ・レッカナー本生物語」といったビルマ語版ラーマヤナが伝わっている。この内、(3) (4) (5) の三点は大英図書館 (British Library) に原本が収蔵されており、マイクロフィルムによる利用が可能である。(1) と (2) は残念ながらまだ原本を見る機会に接していない。

(1) 「マハー・ヤーマ物語」と (2) 「ティイリ・ヤーマ」両作品の特徴は、ウー・テインハン (U Thein Han) の解説によると、次のようにまとめられる。

(1) 「マハー・ヤーマ物語」 (Maha Rama Wutthu) は作者不詳、その内容から19世紀初頭に書かれたと見られる。「青年の巻」 (バーラ・カーンダ) から「結びの巻」 (ウッタラ・カーンダ) までの7巻で構成されているが、第1巻から第6巻までの話の展開はヤーマ・タージンと同じである。(前述の図書館長からの書簡によると、「マハー・ヤーマ物語」 (Maha Rama Wutthu) は、1974年にウー・テットウッヒー・マウンマウンジー両氏によって監修出版されており、ダッタギーリ王の生い立ちからローナ王子の即位に至るまでの15章で構成されていると言う)。なお、この作品の「戦闘の巻」 (ユッダ・カーンダ) には、次のような新しいエピソード4話が加わっている。

1. トゥーヤ鳩槃荼との戦闘。トゥーヤ鳩槃荼がヤーマと戦うため海岸で剣を研ぐ。海が血で真っ赤に染まる。腐臭がすればトゥーヤ鳩槃荼は剣が研げなくなるとビビーザナがヤーマに進言。ハヌマンが犬の死骸に化けてトゥーヤ鳩槃荼のいる所へ漂着する。腐臭を嫌うトゥーヤ鳩槃荼が立上がったところをレッカナが弓で射抜く。

2. フマンビヤ羅刹との戦闘。フマンビヤ羅刹に睨まれた者は即座に灰になってしまう。戦場に現れたフマンビヤ羅刹の姿を見たハヌマンが鏡を立てる。フマンビヤ羅刹は鏡に写った己の顔を睨み一瞬にして灰になる。

3. イエッカニーヤ羅刹女の謀略。ティーターの死体に化身したイエッカニーヤ羅刹女がヤーマのいる所へ漂着する。涙を流すヤーマ。ビビーザナが亡骸を荼毘に付す準備をする。燃焼と同時にイエッカニーヤは蝶に変身して舞い上がる。ハヌマンが追跡して捕捉する。

4. ゴンバディーパ羅刹との戦闘。ゴンバディーパ羅刹は地中に棲む。光と闇とを創造する能力を持つ。その能力を活用してヤーマを地中に拉致する。ヤーマを

処刑する前、ゴンバディーパ羅刹はヤーマに敬礼させようとする。ヤーマの救出に来たハヌマンが、敬礼を強制されたら余は国王であるから敬礼の仕方を知らぬ。お辞儀とはどのようにするものか模範を示してもらいたいとヤーマに言わせる。ヤーマの要求に応じてお辞儀をしたゴンバディーパ羅刹の首を、飛び出して来たハヌマンが切り落とす。

以上の四場面は、登場人物の名前こそ違ってはいるものの、マラヤ版やタイ版にも存在する。タイ版では、1はクンバカルナの供犠、2はピヤコンの息子サン・アティット、3はピペークの娘ベンヤーカイ、4は地下の帝王マイヤーラブにそれぞれ相当するし、マラヤ版では、2はラーワナの息子バダヤ、4はラーワナの息子パタラ・マハーラヤンに、それぞれ相当する。

「マハーヤーマ物語」の最大の特徴は、「結びの巻」（ウッタラ・カーンダ）の追加である。「結びの巻」の内容は次のようにになっている。ダッタギーリ征伐の後ティーターは火の神判を受ける。純潔が証明されてヤーマはティーターをアユダヤへ連れ帰り、即位する。ヤーマは誤解からティーターを追放する。祖父バーラミガの庵に辿り着いたティーターは、10か月後双生児ローナとクシャを出産する。成長した二人は文武両道に長じる。転輪聖王たらんと願うヤーマは諸国の王に忠誠を求める。帰途バーラミガの庵の傍を通りかかる。ローナとクシャが王の馬を捕獲する。双生児とレッカナとの間で戦闘が行なわれレッカナが意識を失う。次いで双生児とヤーマ王との間で戦闘が起り、王も意識を失う。ハヌマンが双生児に捕えられ連行されてティーターに会う。事情を知ったバーラミガは聖水を振り掛けてヤーマ、レッカナを蘇生させる。ヤーマとティーダー再会し、双生児共々アユダヤに帰還する。時至りてヤーマ崩御。ローナが王位を継ぐ。

ヴァールミーキの梵語版には双生児の出産が記述されているのに対し、タイ版では1児出産、行者による分身（レプリカ）創造となっている。この点から考えると、追加された「結びの巻」は、父子間の戦闘場面を除けば、タイのラーマキンエンではなく梵語版から引用したものと見られる。

(2) 「ティーリ・ヤーマ」はネーミヨーナータカ (Nemyo Nathaka) の作品。制作年代は明らかでない。「青年の章」(バーラ・カーンダ) から「戦闘の章」(ユッダ・カーンダ) までの内容は、ウー・アウンピヨーの「ヤーマ・タージン」

と同じであり、「結びの章」（ウッタラ・カーンダ）の内容はマハーヤーマ物語と概ね同じである。ヴァールミーキの梵語版とは異なり、「ティーリ・ヤーマ」ではランカー王城の築城、ダッタギーリー族の系譜が、ダッタラタ王の事象に先立って記述されている。結びはヤーマ王のタヤゾウ川への入水で終る。尚、先行するビルマ語のラーマ物語と比較した場合、「テーリ・ヤーマ」には次のように、エピソードの削除、変更、追加などがある。

削除の例

1. マンゴーの実が十個成了った枝を献上した結果として頭を十個持つダッタギーリが生まれる場面。
2. セイロンオークの樹上に隠れていた猿トゥジェイがヤーマ、レッカナの兄弟愛に感動して落涙する場面。
3. 行者の呪詛により超能力を失ったハヌマンがヤーマに背中を叩かれて超能力を回復する場面。
4. テインコー島へ渡るための石堰の築造中、大蟹ガンドマが妨害する場面。
5. トゥーヤ鳩槃荼が剣に魔力を持たせるため磨いている所へ犬の死骸に化けたハヌマンが現われ鳩槃荼の企みが失敗する場面。
6. イエッカニーヤ羅刹女がティーターの死体に化身してヤーマの所へ漂着する場面。
7. ダッタギーリの祖父をハヌマンが創造してヤーマに献上する場面。
8. 女官達にせがまれてティーターがダッタギーリの肖像を描く場面。
9. 保母コウッパシーがヤーマ王子への王位譲渡をコーチー妃に伝えてその追放を進言する場面。

変更の例。

1. ランカーディーパの羅刹王パントウイエッカ、その妻イエッカニー・デーウィー、娘ネージャータニーの一族が梵天王の命令で追放される。造営された新城を帝釈天の命令で毘沙門天（クウェーラ）が支配する。（先行版では一族の追放場面は無い）
2. ネージャータニがウイトワーラワー行者（梵天王に対してではない）に子宝を祈願、ダッタギーリ、コンビーカンナ、ビビーザナ、タッパナカの3男1女

に恵まれる。

3. アヨウダヤ国の大ッタラッタ王の妃3人は、ホン神への供犠中に現われたゾーユ果2個（バナナ2本ではない）を食べ合う。
4. 大ッタギーリに追われて地中に逃げ込んだ女神ラクシュミをその地を耕作中のミティラー国王ザネッカが発見する。ラクシュミは12歳の少女として現われる。（ティーターの前身は、先行版では乾達婆王の娘とされる）
5. フモーヨン森へのヤーマ王子の追放期間は12年ではなく14年となっている。
6. 大ッタギーリの妹の名前はトリガターまたはガンピーではなく、タッパナカである。
7. 黄金の鹿に変身するのは大ッタギーリの妹ではなく、マイッザ（マリーチャ）である。
8. セイロンオークの樹上に隠れていたトゥジェイがヤーマ、レッカナの兄弟愛に感動して落涙する代りに、ハヌマンがヤーマをトゥジェイの所へ案内する。
9. バーリとトゥジェイとが兄弟同志争う原因是、洞窟羅刹ダーヤーウィマナにある。（ヤーマ物語、ヤーマ・タージン、ヤーマ・ヤガン等には洞窟羅刹は登場しない）
10. バーリの遺児アウングッはインガダと呼ばれる。
11. 女の顔を12年間見たことがないレッカナの指示で、隠遁術を使って身を隠しているエインダジタをヤーマが射殺す場面の代りに、ビビーザナの進言でレッカナがエインダジタを射殺する。
12. 地中に棲み赤色光線の発光と言う特殊能力を持つゴンバディーパ羅刹は、マヒラウンナと呼ばれている。（ベンガル版ラーマーヤナでは、ラヒ・ラーヴアナ）
13. ゴンバディーパの幻術から逃れるためハヌマンがヤーマ、レッカナを口の中に入れて隠して置く代りに、ヤーマはトゥジェイの懷に、レッカナはインガダの懷に隠れる。
14. フマンビヤ羅刹の代りにパトゥディティと言う名称を使っている。
15. 火の神判を受けたティーターが蓮華の上に座った姿で現われた時ヤーマの要請でティーターが火の外へ出てくる代りに、怒ったヤーマに脅迫された火の神が許しを乞う形でティーターが姿を表わす。

16. ティーターが生んだ子供の名前はローナではなくバラとなっている。

追加の例

1. ダッタギーリがランカー城を攻めて毘沙門天（クウエーラ）から王位を奪う。
2. ダッタギーリの中宮（第三王妃）に、息子マヒラーウンナとパトワーディティが生れる。
3. サンダーラ王及びその一族が婆羅門になれるようヤーマ王子が努力する。
4. 行者の生活を妨げるのはカーカウン鶴ではなく、羅刹である。
5. レッカナも弓の競技に参加するが、弓を持ち上げるだけで済ませる。
6. フモーヨン森へ行く途中、ヤーマがガダンタ羅刹を殺す。
7. 鳥のザターユとその弟タンパッティとが登場する。
8. 水牛形の羅刹マヒンダが登場する。
9. ダッタギーリが飛車でティーターを連行する際、鳥のザターユが制止する。
10. ヤーマ兄弟はケイタケインダの森でタンパッティと遭遇する。
11. ランカー島へ跳躍するハヌマンの超能力を雌龍トワーヤッタが試す。
12. アショカ園を荒しているハヌマンを羅刹のエッカヤコンマーが攻撃する。
13. 石垣の築造を巡ってハヌマンとナラとが衝突する。
14. ダッタギーリがヤーマの偽首を創り出してティーターに届ける。
15. エインダジタの龍網に絡まって意識を失ったヤーマの姿を、ダッタギーリがティーターを飛車に乗せて見せる。
16. ヤーマ等が倒れている戦場へ帝釈天の命令で迦楼羅が派遣される。龍網消滅する。
17. 羅刹ドゥメッカとハヌマンとの戦闘。
18. 羅刹アカンマナとハヌマンとの戦闘
19. 羅刹バチャナンダとトゥジェイとの戦闘
20. 羅刹パラッタとナラとの戦闘
21. 羅刹アティカーナランダ兄弟とレッカナとの戦闘
22. ティーターに変身した女羅刹マーヤティーターを飛車に乗せてヤーマ一行の前面に連れ出したエインダジタが、マーヤーティーターを斬り殺す。
23. マガイエッカッタ、ゴンバニゴンバ羅刹兄弟を猿軍団が攻撃する。

24. レッカナの負傷を治すため薬草を探りに向かったハヌマンを行者に変身した羅刹が襲う。
25. ダッタギーリの頭十個はヤーマに射抜かれても直ぐに再生する。
26. ラーマーヤナの詩を完成したワーラミキ行者はバラとクタの二人をアユダヤに派遣し吟唱させる。
27. ヤーマと再会したティーターは永遠の別離を望み、母親トウンダレー (Vasundhara) 女神を念じて地中に没する。
28. レッカナはタラゾウ川に入水して他界、ヤーマ王もその後を追う。その後、四臂のマハーデーヴ (ビシュヌ) として姿を現わす。

以上、削除9例、変更16例、追加28例、合計53例の内、変更と追加の例を、ヴァールミーキの梵語版及びタイ版と比較してみると、「ティーリ・ヤーマ」には梵語版、タイ版双方のエピソードが取り込まれていることが窺える。特に、クリッティヴァーサ (Krittivasa) のベンガル語版ラーマ物語、及びトウルシダース (Tulsi Das) のヒンディー語版ラーマ物語からの影響が濃厚だと言える。

(3)「ポンドー・ヤーマ芝居」は、「アユダヤの章」(アヨーダヤ・カーンダ)と「森の章」(アランニヤ・カーンダ)の2章構成。作者はウー・クー。1880年刊。

「アユダヤの章」は、アヨウダヤ国王ダッタラータ王の会議に始まる。王妃三人と王子4人の誕生。ミティーラ国で行なわれた弓の競技でのダッタギーリの失敗とヤーマ王子の成功。ヤーマ王子とティーターとの結婚。長子ヤーマへの王位譲渡を希望するダッタラータ王。王の癰疽を口に銜えて治した時に交わした王との約束を楯に自分の子バグラの即位を要求する王妃ケーケー。父親の公約を実行するために12年間の期限付きで城を出るヤーマ。フモーヨンの森へ向うヤーマに同行するティーターとレッカナ。バシューラーマ現われタンパタビヤー國の王位譲渡をヤーマに申し出るも、ヤーマこれを謝絶。ダッタラータ王の崩御。バグラ王子ヤーマに復帰を要請。ヤーマ拒否し、草履を渡す。王冠を十個被った羅刹ダッタギーリによるティーハラ・ディーパでのテインコー國の建国。ダッタギーリの妹ガンビーとその子ドゥタ、カヤへの縄張の分与、フモーヨン (ヘーマウン=雪山) の森でヤーマ一行を襲ったガンビーの子ドゥタ、カヤ兄弟、ヤーマの矢で殺される。息子達の死体を見たガンビー、テインコー國へ飛んで兄ダッタギーリに

復讐を嘆願。男二人、女一人合計3人連れの人間の内、男一人は肌が緑色、もう一人は金色、女は天女の如き絶世の美女。男二人を殺せばその女は簡単に手に入る。ラーマ、レッカナの名前は二度と聞きたくない。関わりたくない。兄上は恐れている。頭を使えばよい。私が金色の鹿に変身してティーターの前に現われる。ティーターはラーマにせがむ。その隙にティーターを飛車で連れ去ればよい。鹿に変身したガンビー、ヤーマを誘い出す。ヤーマはティーターの身辺警護をレッカナに依頼して鹿の後を追う。ヤーマ、鹿を弓で射る。矢が突き刺さった鹿姿のガンビー、羅刹の姿に戻りヤーマの声を模倣して絶叫する。ティーター、レッカナにヤーマの救助に行くよう指示。レッカナは曼陀羅で呪縛を設定し、圈外へ出ぬようティーターに警告して兄の後を追う。行者に変身したダッタギーリ、布施を求めて出現。ティーダーを飛車に乗せて拉致する。

以上の内容を見る限り、作者サヤー・クーは、ウー・アウンピヨーの「ヤーマ・タージン」の内容を踏襲していることが判る。但し、(1)ケーケー妃がダッタラータ王の人差指の癰疽を口で吸って治す。(2)パシューラーマがタンパタビヤ国(?)の王位をヤーマに提供するの2点だけは、特殊である。「ポンドー・ヤーマ」には、「青少年の章」「戦闘の章」「結びの章」等は存在しない。

(4)「ヤーマ三種本生物語」は散文体の物語で、「青年の章」(バーラ・カーンダ)から「結びの章」(ウッタラ・カーンダ)までの7章構成。作者はサヤー・トゥエー。1904年刊。大英図書館にあるのはウー・ポーセインの監修になるもの。ヤーマ三種本生物語の内容は「マハーヤーマ物語」と同一。終り方も、「マハーヤーマ物語」の場合と変りない。

但し、登場人物名には次のような特殊な形が見られる。アヨウタマ(アヨーダヤー)、パドンマ・ティンカー(コーサリヤー)、ケッカルワディー(カイケーイー)、マハーザナパダ(ジャナカ)、ウダラバラ(バラタ)、ボンマレータ(マヒラワンナ)、マハーペインナ(イエッカニーヤ)等。

なお、「ヤーマ三種本生物語」には、次のような特徴が見られる。

1. スミトラ王妃、シャトルグナ王子は登場しない。
2. バーリの子アウングッは登場しない。
3. ダッタギーリの息子インドラジットは登場しない。

4. 人類の起源は地上に降下した梵天。土壤を食べて男女の区別が生じる。
5. ダッタラータ王の父アーユダーラは行者になる。
6. ティーターの前身サンダティーターは蓮華の中に生れ変わる。ザナパタ王が蓮華の花弁を剥ぎ取りティーターを発見する。
7. 行者に迷惑をかけていた巨大な鶴はヤーマに捕えられ、一握りくらいの大きさに収縮する。
8. 諸国の王宛の弓の競技への招待状を行者がヤーマにも届ける。その招待状が風に飛ばされ、ダッタギーリの手に渡る。
9. ティーターを誘拐したダッタギーリの飛車を鳥のポンマティーが妨害する。
10. ダッタギーリは、誘拐してきたティーターを地中の鉄の檻の中に閉じ込める。
11. ハヌマンは緊那梨のメッカタ (Makkaṭa) によって谷間に生み落とされる。
12. バーリ、スグリープ兄弟の内、バーリは弟、スグリープは兄である。
13. エインダリタに捕えられたヤーマを救出するため、ハヌマンがオタマジャクシに化して水汲み女の水甕の中に入り、テインコー市街に潜入する。
14. ハヌマンは、石堰築造後、ランカー島へ跳躍する。
15. ダッタギーリの息子フマンビヤ羅刹は魔法の鏡の持主だが、犬の死骸の腐臭のせいで鏡を捨てる。
16. 薬草を探すハヌマンの声に薬草が呼応するが、ハヌマンが山頂で呼べば山麓で答え、山麓で呼べば山頂で返事する。
17. ランカー市街を焼失させたハヌマンは、ティーターを救出してヤーマの元へ帰還する。
18. ヤーマは、レッカナの指差す方向に矢を射る事で、ダッタギーリを殺す。
19. ティーターの純潔を確かめるための火の神判は行われない。
20. アユタヤに帰還したヤーマに王位を返還した弟のウダラバラは、行者になる。
21. ヤーマに追放されたティーターは、行者ウダラバラの庵に辿り着く。
22. ティーターは一子ローナを出産する。後に行者がウシャ草を手に曼陀羅を唱えローナの分身ウシャを創造する。
23. ヤーマとその子二人との戦闘で、ヤーマの放った矢は子供達の眼前で菓子に変り、子供達が放った矢はヤーマの眼前で「おこし」に変る。

以上のように、「ポンドー・ヤーマ」の内容には、先行版とは異なるエピソードが含まれている上、タイ版、マラヤ版とも違うエピソードが組込まれている。

尚、題名の「ヤーマ三種」とは、(1) アラウン・ヤーマ、(2) ポンドー・ヤーマ、(3) バシュー・ヤーマの三種を指す。その内(1)のアラウン・ヤーマとは「ダシャラタ・ジャータカ」に登場する菩薩のラーマの事であり、(2) のポンドー・ヤーマとはヒンズー教のビシュヌ神の垂跡としてのラーマである。バシュー・ヤーマのバシューもヴィシュヌの変形と考えられる事から「ヤーマ三種」は、正確には「ヤーマ二種」と称するべきだとウー・テインハンは述べている。もっとも、バシュー・ヤーマのバシューは、正確にはパラシュー・ラーマすなわち「斧を持つラーマ」で、ラーマや仏陀同様、ビシュヌ神の垂跡である。

(5) 「ポンドー・ヤーマ・レッカナー本生物語」は、ダーペイン・ウーマウンジーの作品で、1910年刊行。内容は「青年の章」(バーラ・カーンダ) 1章のみの構成である。但し中身はかなり特殊で、在来のビルマ語版ラーマ物語のどれとも似ていない上、タイ版、ラオス版、マラヤ版とも異なる。物語の梗概は次の通り。

1. 梵天界から下界に降下した梵天24人の内、一人が焼け土を口にして体から発していた光が消える。

2. 1羽のミナミハイタカが現れ翼で日光と月光とを遮る。この世は暗黒の帳に包まれる。ミナミハイタカの退治を帝釈天に訴える。

3. 帝釈天はミナミハイタカを金剛杵で貫く。ミナミハイタカは七つに分散して落下する。ハイタカの落下地点に国ができる。頭部の落下地点にはアヨウダヤ国が生じ、ダッタラッタ王やヤーマ、レッカナ等が出現する。胴体の落下地点はティンコー島となり、ダッタギーリやマンネーダリ（マンドーダリ）等が現れる。尾の落下地点はタンパタビヤー国、バシューヤーマが現れる。右翼の落下地点はケイタケインダー国、猿のマハーメッカタ王とその子トゥジェイ（兄）、バーリ（弟）兄弟が生れる。左翼の落下地点はミティラー国、マハーザネッカ王が出現する。右脚の落下地点はフモーヨンの森となり、ワーティタ行者の庵が築かれる。左脚の落下地点はセイロンオークの森となり、羅刹女のティーターイエッカとその召使デッチーが姿を現わす。

4. セイロンオークの森に棲む羅刹女のティーターイエッカがヤーマに恋慕する。

デッチーを伴ってフモーヨンの森のワーティラ行者の庵を訪れる。行者不在のため庵を壊して帰る。戻ってきて庵が荒されていることを知った行者は、アユタヤへ行ってダッタラッタ王に訴え、ヤーマ、レッカナ両王子の派遣を要請する。ワーティラの庵を再訪したティーターイエッカが気勢を上げる。羅刹女の姿を見たヤーマは、弓で射殺す。死んだティーターイエッカは四王天でティーターサンダ天女に転生、デッチーはマニメーカラー女神（海の守護神）に転生する。ティーターサンダはヤーマを恋慕し続ける。

5. 飛車に乗って四王天に現れたダッタギーリが、ティーターサンダを見初める。ダッタギーリに口説かれたティーターサンダ、これを拒否、ダッタギーリの牙に託胎するよう祈願する。誕生後泣き声をあげる度に羅刹一千匹が死ぬよう呪詛し、ダッタギーリの牙に宿る。

6. テインコー島に戻ったダッタギーリ、体調を崩す。特に左の牙に疼痛を覚える。ビビーザナが牙から膿を取り出す。中からティーターが転がり出る。産声をあげる度に羅刹一千匹が死ぬ。ティーターはエメラルドの箱に密封され、大海に流される。

7. ティーターの入った箱をマニメーカラー女神がミティラーの岸辺に運ぶ。マハーザネッカ王が浜辺に来て水浴、足の裏に硬い物を踏みつける。潜水して箱を引き揚げ、ティーターを発見する。

以上の展開を見ると、「ポンドー・ヤーマ・レッカナ本生物語」の内容は、在来のビルマ語版ラーマ物語とは著しく異なっている事が窺える。特に、帝釈天に射抜かれたミナミハイタカの身体が七分裂して落下し七か国が出現する場面は、東南アジアの他の版にも見られない特殊なエピソードとなっている。また、ティーターの前身が天女であった事はタイ版、ラオス版、ジャワ版等に共通して見られるが、更にその前身が羅刹女であった事、羅刹女の時からヤーマを慕っていた事等は、「ポンドー・ヤーマ・レッカナ本生」特有のエピソードと言ってよい。

6. ビルマ語版ラーマ物語の特徴

ビルマ語版ラーマーヤナの内、(1) ヤーマ物語、(2) ヤーマ・タージン、(3) ア

ラウン・ヤーマ・タージン、(4) ヤーマ・ヤガンの四作品に共通して見られる特徴を列挙すると、次のようになる。

1. 十頭の持主ダッタギーリの由来。羅刹王の娘ガンビー（またはクンティー）が梵天王にマンゴーの枝3本を献上。1本には実が十個稔っていた。ガンビーの長子ダッタギーリは頭を十個持って生れる。
2. ダッタギーリの超能力。ダッタギーリ等ガンビーの子供3人は父親の梵天王に望みを適えて貰う。ダッタギーリは人間と猿以外の生き物に対する不死身と、火、水、刀剣に対する不死身とを保証される。但し、アッタサンダ（半月形の武器）を除く。
3. マンドーダリの身元。ティンコー島の支配権を祖父から譲り受けたダッタギーリは、マンドーダリを妃に迎える。マンドーダリは、阿修羅王の娘である。二人の間にメーガナータ（成人後エインダセイタと改称）が生れる。
4. ティーターの前身。ティーターの前身は香醉山で修行をしていた乾達婆王の娘である。ダッタギーリに口説かれ火中に飛び込んで憤死、マンドーダリ（または蓮華の中）に託胎する。
5. ティーターの遺棄。誕生したティーターは鉄の函に密封され、海中に投棄される。ミティラーの海岸に漂着した函をザネッカ王が発見、ティーターと命名して養育する。
6. バナナ2本とダッタラッタ王の王子3人。ダッタラッタ王が行者に貰ったバナナ2本を持ち帰り、妃3人に食べさせる。ヤーマ、レッカナ、バラタ、タッタルグナの王子4人が誕生する。長子ヤーマは菩薩の生れ替りである。
7. 弓の競技にダッタギーリ参加。ティーターの婿選びである弓の競技にダッタギーリも参加し、弓を持ち上げるが矢を番える事はできない。ヤーマの成功を目撃したダッタギーリ、逃走する。
8. ヤーマ王子の追放期間。ケーケー妃がバラタ王子への王位継承を要求する。ヤーマ王子の森への追放期間は12年間。
9. 黄金の鹿に変身するガンビー。フモーヨンの森で我が子カラとドゥタをヤーマ一行に殺されたミ・ガンビー（またはトリガター）は、ティンコー島の兄ダッタギーリに復讐を求める。自ら黄金の鹿に変身してヤーマを誘い出す。

10. ティーターの周囲の呪圏。ヤーマの救援に赴くレッカナは、安全のためティーターの身の回りに曼陀羅で三重（または七重）の呪圏を描く。ダッタギーリはこの呪圏の中には入れない。
11. ヤーマ、レッカナの兄弟愛とトウジェイとの邂逅。トウジェイが身を潜めているセイロンオークの樹下にティーター捜索中のヤーマ、レッカナ兄弟がやって来て休憩する。ヤーマは弟にもたれ掛かって居眠りする。レッカナの背中を大蛇が咬む。出血するが、兄が目を覚まさないようレッカナは身動きしない。二人の兄弟愛に感動したトウジェイは、落涙する。
12. 決闘するバーリ、トウジェイ兄弟の識別。兄と弟とを識別するためトウジェイの肛門にキンマの噛み汁を塗る。猿の尻が今でも赤いのはこれが起源だとする。尚、「ヤーマ・タージン」と「アラウン・ヤーマ・タージン」の2作品では、トウジェイが兄（または正妻の子）、バーリが弟（または後妻の子）となっており、バーリを兄、トウジェイを弟とする「ヤーマ物語」とは異なる。
13. 太陽に挑む掛って焼け死んだ過去を持つハヌマン。太陽を熟したヤサイカラスウリ（またはコンチンナアカシア）の実だと勘違いして飛び掛かったハヌマンは、火の神の怒りで命を落とすが、父親である風の神の懇願により帝釈天の力で蘇生し、不死身の体となる。
14. ティーターの頭髪を持ち帰ったハヌマン。テインコー島へ跳躍してティーターの居場所を確認したハヌマンは、ランカー城を焼失させた後、ティーターから頭髪7本（または10本）を貰って帰りヤーマに渡す。
15. 石垣工事と大蟹の妨害。ランカー島へ渡るために石垣を築造中に大蟹ガンダッガ（またはガンダン）が工事を妨害する。蟹を捕えたハヌマンは、鉄をもぎ取つて釈放する。（タイ版では、猿と蟹との混血児が生まれる）
16. エインダジタの龍の網。ダッタギーリの息子エインダジタが所有する龍の網に絡まったヤーマは意識を失う。ハヌマンが香醉山から持ち帰った薬草で蘇生する。
17. 隠遁術を使うエインダジタとレッカナの透視力。隠遁術を使ったエインダジタの姿は誰にも見えない。その姿は女の顔を12年間見た事がない者にのみ見える。ティーターの足元ばかり見ていて顔を見た事がないレッカナにはエインダジタの

姿が見える。エインダジタの所在場所をレッカナに教えて貰ったヤーマが弓を使ってエインダジタを射殺す。

18. ハヌマンによる護摩壇の破壊。宿敵調伏の供儀を行なうダッタギーリの護摩壇をハヌマンが妨害する。

19. ヤーマの威力を怖がるダッタギーリ。弓の競技で自分より強力であった事を知り現場から逃走した（「ヤーマ物語」「ヤーマ・タージン」「ヤーマ・ヤガン」）過去を持つダッタギーリには、ヤーマへの恐怖感がある。そのため、息子二人の復讐を求める妹トリガターの要請に対しても最初は二の足を踏む（「ヤーマ物語」「ヤーマ・タージン」「ヤーマ・ヤガン」）。また、弓にアッタサンダを番えたヤーマの姿を見ると、飛車を降りて土下座し、命乞いをする（ヤーマ・タージン）等の醜態を晒す。

20. 回転刃（アッタサンダ）によるダッタギーリの最期。ダッタギーリはヤーマの放った回転刃によって頭十個を截断され絶命する。

21. ティーターの火の神判。救出されたティーターは火炎の中に飛び込んで純潔を証明する。「ヤーマ物語」と「アラウン・ヤーマ・タージン」とにその記述あり。

22. ダッタギーリの肖像とティーターの追放。ティーターは侍女達（または侍女に化身したダッタギーリの妹）にせがまれてダッタギーリの肖像を描き、ヤーマに追放される（「ヤーマ物語」「アラウン・ヤーマ・タージン」）。

23. ティーターの一児出産。ヤーマに追放されたティーターは行者の庵で一児を出産する。瞑想中に嬰児の姿を見失った行者が分身（レプリカ）を創造する。「アラウン・ヤーマ・タージン」では一児の出産と分身の創造が述べられているが、「ヤーマ物語」では梵語版と同様、双生児ローナ、クシャの出産が語られている。

尚、番号20以下の事柄を叙述した「結びの章」（ウッタラ・カーンダ）は、「ヤーマ・タージン」には存在しない。

まとめ

以上述べた特徴から判断すると、ビルマのラーマ物語は、ヴァールミーキの梵

語版に比較的忠実なインドネシアのラーマーヤナ・カカウインとも違えば、独特的エピソードを豊富に内包するマラヤのヒカーヤット・スリ・ラーマやタイのラーマキエン等とも異なる。東南アジア版ラーマ物語の中では、ラーマーヤナ・カカウインやカンボジアのリアムケー等を仮に第1グループ、ヒカーヤット・スリ・ラーマやラーマキエンを第2グループと分類するならば、ビルマ語版ラーマ物語はそのいずれでもない「第3グループ」を形成すると言う事ができる。この第3グループの中には、ビルマ語版の他に、中国雲南省の傣語版ラーマ物語「蘭嘎西賀」やラオ語版ラーマ物語の一つ「パラク・パラム・ポンマチャク」等も所属すると筆者は見ている。これらの3作品が、タイ版ラーマ物語やマラヤ版ラーマ物語には見られない独特のエピソードを共有していること、3作品の構成が基本的に同じである事、登場人物の名称に共通性があることなどの事実が、いわゆる「第3グループ」成立の根拠である。(この点については、別の機会に詳述する)。目下調査中のモン語版ラーマ物語「ロイク・サモイン・ラム (Loik Samoing Ram)」も第3グループの中に含めてよいかも知れない(この版についても、近い将来その内容と特徴とを報告する予定にしている)。ところで、これらの3作品(あるいは4作品)が同一のグループを形成しているのはなぜなのかと言うことについては、現在の時点では何とも言えない。確実な根拠は何もないが敢えて推論を述べるとすれば、現在ではもはや幻の版としか言えないタイの「アユタヤ版」が何らかの形でこれら3作品(あるいは4作品)に関わりを持っている可能性は考慮してよいかも知れない。この点は今後の検討課題であろう。

参考文献

- Rama Vatthu (Palm leaf manuscript written in Burmese). 1871
U Toe: Rama Yagan. Rangoon vol.1 1933, vol.2 1965
U Aung Hpyo: Rama Thagyiin (Palm leaf manuscript in Burmese). 1886
Hsaya Htoon: Alaung Rama Thagyiin. Rangoon 1905
U Ku: Pondaw Rama Pyazat. Rangoon 1880
U Hpo Sein: Rama Thonmyo Zatwutthu. Rangoon 1935
Dabein U Maung Gyi: Pondaw Rama Lekkhana Yodaya Zatwutthu. Rangoon

1910

U Thein Han & U Khin Zaw: Ramayana in Burmese Literature and Arts.

JBRS 59 1976

Zaw Gyi: Myanmar Yama Akayung Hmat-su. (1-8). Ngwe Tayee Magazine
1971 August - 1972 May.

Connor, J. G: The Ramayana in Burma. JBRS 15 1925

Vo Thu Tinh: Phra Lak Phra Lam, version Lao du Ramayana indien.
Vientiane 1972

Sachchidanand Sahai: The Phra Lak Phra Lam or the Phra Lam Sadok.
Delhi 1976

Aiyar, V. V. S: Kamba Ramayana, a study. Bombay 1987

Rai Saheb Dineshchandra Sen: The Bengali Ramayana. Galcutta 1987

Raghavan, V: The Ramayana Tradition in Asia. New Delhi 1980

Srinivasa Iyengar, K. R: Asian Variations in Ramayana. New Delhi 1983

Makhan Lal Sen: The Ramayana, translation from the original of Valmiki.
Calcutta 1976

Griffith, Ralph T. H: The Ramayan of Valmiki. Varanasi 1977

Goldman, Robert G: The Ramayana of Valmiki. Vol. 1 1984, vol.2 1986
Princeton U. P.

Jacobi, Herman: Das Ramayana, Geschichte und Inhalt. Bonn 1893

OHNO Toru: The Burmese versions of the Rama story and their peculiarities.
pp.305-326 in Uta Gärtner and Jens Lorenz ed. Tradition and Modernity
in Myanmar. Humboldt Universität 1994.

楊仲祿責任輯『蘭嘎西賀 傣族神話敘事長編詩』 雲南人民出版社 1981

大野徹「東南アジアのラーマーヤナ(1)インドネシア、マレーシア、フィリピンの伝承」『大
阪外国語大学アジア学論叢』第3号 1993 p.37-70.

大野徹「東南アジアのラーマーヤナ(2)タイ、カンボジア、ラオスの伝承」『大阪外国語大学
アジア学論叢』第4号 1994 p.255-308.

Ramayana Legends prevailed in Southeast Asia (3) — Burmese Versions —

OHNO Toru

It has been proved now, according to an information by a letter from U Khin Maung Tin, Chief Librarian of the National Library, Ministry of Culture, Government of Myanmar, that even thirteen texts of the Rama story written in Burmese are still extant either in the form of printed books or palm leaf manuscripts. The author of this paper intends to point out the prominent features found in seven texts of the Rama story, namely Rama Vatthu, Rama Thagyin, Alaung Rama Thagyin, Rama Yagan, Pondaw Rama Pyazat, Rama Thonmyo Zat Vatthu and Pondaw Rama Lekkhana Zat Vatthu, among thirteen written in Burmese.

U Thein Han, the late Chief Librarian of the Universities Central Library, Rangoon, reported that two palm leaf manuscripts of the Rama story called "Rama Vatthu" have been discovered in 1973, one in a Buddhist monastery in Pagan – Nyaungoo area and the other in a monastery, Kyaik Waing, near Rangoon. He estimated the original date of both manuscripts goes back probably to 17th century. If it is correct, Rama Vatthu is regarded to have been the earliest surviving version of Rama story in Burma. According to a photocopy taken from the manuscript, it is found that Rama Vatthu is written in prose and consists of six chapters totalling forty pages.

"Rama Thagyin" is composed in verse by U Aung Hpyo in 1755. According to the colophon of a handwriting copy from an extant palm-leaf manuscript preserved in the Universities Central Library, Rangoon, it

is written on the day of full moon of May 1886.

"Alaung Rama Thagyin" is composed in verse, too, by Hsaya Htoon. What is interesting here is that the pronounciations and spellings peculiar to the Arakanese dialect are to be found here and their in this Thagyin. Nothing has been known, however, about the exact date of composition of this Thagyin.

"Rama Yagan" composed by U Toe in 1784 is one of the most prominent versions of the Rama story in the history of Burmese literature. It is, however, incomplete, because of author's death immediately after having composed 34 chapters.

The author of this paper obtained recently a microfilm copy of three other texts of Rama story printed in Burmese from the British Library by virtue of a valuable information given by Patricia Herbert, Curator of the Southeast Asia Collections, the British Library. These texts are composed of (1) Pondaw Rama Pyazat, (2) Rama Thonmyo and (3) Pondaw Rama Lekkhana Yodaya Zattawgyi. The first text is written by U Ku in 1880. It is composed of only two chapters, viz Ayodhya Kānda and Aranya Kānda. It lacks three other important chapters like Bāla Kānda, Yuddha Kānda and Uttara kānda. The second text is written in prose by U Htway in 1904. It is composed of seven chapters commencing with Bāla Kānda and ending with Uttara Kānda. The main accounts and the order of arrangement are on the whole, similar to those of Rama Thagyin and Maha Rama. The third text is written by Dabein U Maung Gyi in 1910. It is composed of only one chapter, Bāla Kānda. The most striking feature of this text lies in an account of a giant falcon, which hides sun and moon with its enormous wings, immediately after the appearance of the cosmos. The earth, the whole Jambudvipa, is covered with darkness. Human beings and other animals on the earth are shocked and distressed to be able to see nothing. Indra hurls his Vajra at the outrageous bird. The body of the

giant falcon is severed by Vajra into seven pieces and falls down to the ground separately. Seven places appear on the spots where the seven pieces of the falcon fell down. Ayodhya city appears at first on the spot where the head of the bird fell. Secondly Theinkho (Lanka) city appears at the place where the torso of the bird fell. Kishkhinda forest appears on the spot where the right wing of the bird fell, and like that Mithila city the left wing, Hemawan forest the right leg and Ceylon Oak tree the left leg in succession. The rulers of each place are chosen by respective inhabitants. The people of Ayodhya entrust their adminstaration with Datharahta. The Rakshasas of Theinkho island choose Dathagiri (Rāvana) as their king. The apes of the Kishkhinda forest elect Maha Makkata, the father of Bāli and Sugriva brothers, as their ruler. This episode of giant falcon is entirely known neither to other Burmese versions nor to any other vernacular versions of Southeast Asia such as Ramakien of Thai and Hikayat Sri Rama of Malaysia. It is needless to say that the third text, Pondaw Rama Lekkhana Yodaya Zattawgyi, has undergone tremendous changes.

It may be pointed out that the following accounts are the major characteristics of the Burmese versions of Rama story.

(1) What is interesting is the Burmese versions of Rama story begin with the detailed accounts of Datthagiri (Rāvana). They narrate the genealogy of Datthagiri, the birth of Datthagiri, his attainment of supernatural power in consequence of his ascetic practices through meditation and devotions. It is quite conspicuous in contrast to the current version of Vālmiki Rāmāyana, in which the genealogy of Rāvana is related not in the First Book, Bāla Kānda, but in the Last Book, Uttara Kānda.

With regard to the birth of Datthagiri, the Burmese Rama stories describe that Mahā Brahmā descends from Heaven to Hemawan forest where Kunti (Me Gambi or Ni Gonbi), the daughter of Rakshasa King of

Lankā, practises asceticism for eighty thousand years. Kunti offers three branches of Mango to Mahā Brahmā. The first branch bears ten fruits. The second branch bears a big fruit. As she drops unconsciously the third branch bearing only one fruit, Kunti offers the fruit after cleaning. Maha Brahma strokes her belly three times and tells her that she will give birth to three children near future. Ten months later, Kunti bears three sons, named Datthagiri, Gombikanna and Bibithana. The first born child possesses ten heads, twenty arms and twenty legs. The second child possesses a hugh body. The third child is endowed with a profound knowledge of astrology. One can find this episode in Muongsing version of Laos and Lanka Xiho, the Tai version of Yunnan, China, too.

(2) Regarding the story connected with the birth of Rāma, The Burmese versions of Rama story state that the king Dattharatha of Ayottaya hands over to his three consorts two bananas which he got from a sage Trisula in Hemawan forest. The three consorts become pregnant and give birth to three sons. The chief queen, Kothanra, is delivered of Prince Rama. The second queen has prince Bharata and the third queen gives birth to twins, Lekkhana and Thattaruguna. There is mention of the similar episode in Lanka Xiho, the Tai (Lu) version of Yunnan. It is worthy of note that the Burmese versions mention unanimously the previous status of Rama as a Bodhisattva, the future Buddha, unlike the descriptions of Vālmīki and Kampan.

(3) In regard to the period of Rama's exile from his palace, the Burmese versions describe twelve years instead of fourteen years. The Tai (Lu) version of Yunnan, Lanka Xiho, and Muongsing version of Laos state also the period of Rama's exile as twelve years. Vālmīki Ramayana together with other Southeast Asian versions such as Ramakien of Thai and Reamker of Cambodia narrate, however, the period of Prince Rama as forteen years. It should be noted that the twelve years of exile is identical

with the Jaina Ramayana, Daśaratha Jātaka and other Suttas of Buddhist Canon.

(4) In the Burmese versions of Rama story, Mi Gambi (Trigata), Datthagiri's sister, is beleft of her two sons, Khaya and Dutta, in a battle with Rama and Lekkhana in Hemawan forest. In the Vālmīki Rāmāyana, However, Śūrpanakhā has neither husband nor son. Those who fight on her behalf against Rāma and Lakṣmana are her brothers Khara and Dūshana. According to the Burmese versions, it is also Mi Gambi who transforms herself into a golden deer and entices Rama and Lekkhana out of their hermitage so that Datthagiri will be able to abduct Thida. This episode can be seen also in Lanka Xiho, the Tai (Lu) version of Yunnan and Muongsing version of Laos.

(5) In the Burmese versions of Rama story, three or seven lines of concentric circles are drawn by Lekkhana for the purpose of protecting Thida, when he leaves to save elder brother Rama. There is no mention of a magic circle in Vālmīki Rāmāyana. Lanka Xiho, the Tai (Lu) version of Yunnan and Muongsing version of Laos, Phralak Phralam Pommachak, contain the similar account of a magic circle drawn by Lakkhana. He warns Sinta not to go out of the circle whoever comes, for no body, on earth or in the air, can transgress over the magic circle. During his absence, Thorani (Dharani=the Goddess of the Earth) protects Sinta against Pommachak (ten headed king of Rakshasa).

(6) The Burmese Rama stories contain an episode of a deep affection of Lekkhana toward his brother Rama, when they rested under the Ceylon Oak tree, on which Thugyeit (Sugrīva) crouches. As Rama becomes fatigued for he has searched for Thida without taking a brief rest, he sleeps with his head in Lekkhana's lap. Lekkhana does not move at all, lest he should disturb Rama's slumbers, even when he was stung by a hugh horsefly. Thugyeit is an eyewitness of this scene and moves to tears. The

similar episode can be found in the Lanka Xiho, the Tai (Lu) version of Yunnan.

(7) As Rama has been unable to discern Sugrīva from Vāli, he demands Sugrīva to tie a blossoming Naga creeper round his neck, in Vālmīki Rāmāyana. Rama asks Sugrīva to wear a garland of flowers, in Kampan Ramayana. The Burmese versions of Rama story state that Rama paints Thugyeit's anus red with a chewing betel so as to distinguish two ape brothers in their duel. Lanka Xiho, the Tai (Lu) version of Yunnan, describes that prince Lamma paints Kaling (Sugrīva)'s head red with a chewing betel. The Vientiane version of Laos narrates that Phra Lam recommends Sangkhip (Sugrīva) to put a white shawl on his head in order to differentiate from Phalichanh (Vali) in the first duel. Phra Lam recommends Sangkhip to put red shawl on his shoulder in the second duel. For the third duel, Phra Lam paints white lime secretly on the soles of Sangkhip's feet so that Phalichanh can not perceive.

(8) In Vālmīki Rāmāyana, Hanumān brings a headgear of Sītā back to Rāma on his return journey from Lankā. In Burmese versions of Rama story, Hanuman carries seven (or ten) hairs of Thida away to Rama as the evidence of Thida's life. Lanka Xiho, the Tai (Lu) version of Yunnan, also contains the similar episode.

(9) Rama commands Sugrīva to construct a causeway across the island of Lanka. In the Burmese versions of Rama story, a giant crab obstructs against the construction of causeway. The causeway is constructed and destroyed again and again. Hanuman dives into the bottom of the sea to investigate the cause of destruction and finds that a giant crab, Maha Gandagga, carries away the stones of the bridge foundation. He seizes the crab and hurls far inland. Rama commands the apes to wrench the claws of the crab and to release it. Lanka Xiho, Tai (Lu) version of Yunnan, also, deals with the similar episode of a giant crab, in the process of

construction of a causeway.

(10) Meghanada, Rāvana's son, is well known to have been valor, since he once took Indra prisoner during the battle between king Asura and Indra.

Meghanada has been known as Indrajit. He possesses various magical powers, and employs a special black art if necessary. Even Lakshmana has once been killed by the arrow called Brahmastra released by Indrajit. According to the description of the Burmese versions of Rama story, the most fearful power of Eindaseitta (Indrajit) is his miraculous power of becoming invisible from human sight. No one can see Eindaseitta. Bibithana (Vibhishana) advises Rama that Eindaseitta can be seen only by the one who has not looked upon any woman's face during past twelve years. Lekkhana is proved to have been such a person who did not see any woman's face for that period. Lanka Xiho, the Tai (Lu) version of Yunnan, gives an account of the similar episode of Lakhana. The Bengali version of Rāmāyana seems to have played a significant role to bring the episode into the Burmese version and the Tai version of Yunnan.

From the above accounts I have quoted, it became clear that the main features of the Burmese versions of Rama story have considerable affinity with those of the Lanka Xiho of Yunnan and the Muongsing version of Laos. It is believed that three versions of Burmese Rama story, Lanka Xiho of Yunnan, China, and Phralak Phralam Phommachak, the Muongsing version of Laos, compose of a single group separated from the other vernacular versions of Southeast Asia, such as Serat Kanda of Java, Hikayat Sri Rama of Malaya and Ramakien of Thai. Outstanding elements peculiar to them are supposed to have been derived directly or indirectly from the so-called Non-Vālmīki Indian versions includng the Bengali, the Jaina, the Kashmiri and other vernacular verions of India.